

第16回教育委員会（定）

開会日時 令和元年 7月 25日（木） 午前 10時00分
閉会日時 午後 04時38分
開会場所 第一委員会室

出席者

教 育 長	中 川 修 一
委 員	高 野 佐紀子
委 員	青 木 義 男
委 員	松 澤 智 昭
委 員	長 沼 豊

出席事務局職員

事務局次長	藤 田 浩二郎	地域教育力担当部長	松 田 玲 子
教育総務課長	木 曾 博	学 務 課 長	星 野 邦 彦
生涯学習課長	水 野 博 史	地域教育力推進課長	諸 橋 達 昭
指 導 室 長	門 野 吉 保	教育支援センター所長	平 沢 安 正
新しい学校づくり課長	渡 辺 五 樹	学校配置調整担当課長	大 森 恒 二
施設整備担当副参事	千 葉 亨 二	中央図書館長	大 橋 薫

署名委員

教育長

委 員

午前 10時 00分 開会

教 育 長 おはようございます。
本日は、4名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立いたしました。
それでは、ただいまから、令和元年第16回の教育委員会（定例会）を開催いたします。

本日の会議に出席する職員は、藤田次長、松田地域教育力担当部長、木曾教育総務課長、星野学務課長、水野生涯学習課長、諸橋地域教育力推進課長、門野指導室長、平沢教育支援センター所長、渡辺新しい学校づくり課長、大森学校配置調整担当課長、千葉施設整備担当副参事、大橋中央図書館長、以上12名でございます。

本日の議事録署名委員は、会議規則第29条により、松澤委員にお願いいたします。

本日の委員会は、32名から傍聴申し出がなされており、会議規則第30条により許可しましたので、お知らせいたします。

初めに、私から報告いたします。

7月12日をもちまして、上野広治委員が、任期満了に伴い、ご退任されました。かわって、長沼豊委員が、6月21日開催の区議会本会議におきまして、板橋区教育委員会委員としての同意を得て、7月13日付で区長から教育委員に任命されたことをご報告いたします。

それでは、長沼委員にご挨拶をお願いいたします。

長 沼 委 員 長沼でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。
不慣れではございますが、板橋区のため、板橋の教育のために精一杯務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

教 育 長 これから、どうぞよろしくお願いいたします。
次に、本日の運営についてお諮りします。
本日の会議では、令和2年度区立小・中学校使用教科用図書採択に関する議案及び請願を審議しますが、長時間の審議となることが見込まれることから、次第の順番とは前後しますが、初めに、日程第17 議案第31号「令和2年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について」を審議します。
なお、議事運営の都合上、この後、12時までを目途に審議し、暫時休憩を挟み、審議を進めてまいります。より慎重に適正かつ公正に採択を行うため、本日の会議では一定程度の教科の審議を行い、残りの教科につきましては、8月1日木曜日に、臨時で教育委員会を開会して審議したいと存じますが、よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、そのように決定します。

○議事

日程第十七 議案第31号 令和2年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について

(指導室)

教 育 長 それでは、議事に入ります。

日程第十七 議案第31号「令和2年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について」、審議します。

指導室長から説明願います。

指 導 室 長 それでは、説明させていただきます。

公立学校において使用する教科用図書の採択は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第21条第6号」により、所管の教育委員会が行うこととなっており、「義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律施行令第14条」において、当該教科用図書を使用する年度の前年度の8月31日までに行わなければならないと定められております。

また、採択した教科用図書は、種目ごとに4年間は同一の教科用図書を使用することとなっております。

なお、特別支援学級におきましては、「学校教育法附則第9条」及び「同法施行規則第139条」に基づき、検定済教科用図書または文部科学省著作教科書を使用することが適当でない場合は、他の適切な教科用図書を使用することができるとされております。

採択につきましては、毎年度、採択できることとなっております。

今年度は、採択事項（1）令和2年度区立小学校使用教科用図書、採択事項（2）令和2年度区立中学校使用教科用図書（道徳を除く）、採択事項（3）令和2年度区立中学校使用教科用図書（道徳）、採択事項（4）令和2年度特別支援学級使用教科用図書を採択していただきます。

事務局で採択一覧（案）を作成いたしました。

発行者名が空欄の種目につきましては、今年度、採択を行っていただきます。

発行者名が記入されている中学校の「道徳」につきましては、令和元年度に引き続き、令和2年度から使用する教科用図書として採択していただきます。

次に、特別支援学級で使用する教科用図書につきましては、東京都が調査研究した教科用図書と当区の教科用図書調査委員会が調査研究した教科用図書、そして、それ以外で区立小・中学校が調査研究した教科用図書について採択していただきます。

説明は以上でございます。

教 育 長 それでは、順番が前後しますが、まず、採択事項（2）令和2年度区立中学校使用教科用図書（道徳を除く）について、審議します。

指導室長から説明願います。

指導室長 区立中学校の教科用図書につきましては、平成27年度に採択を行いましたので、今年度、採択替えを行います。

ただし、平成30年度の検定において、新たな図書の合格がなかったため、前回の平成26年度検定本から採択することとなります。

また、採択に当たりましては、平成27年度の教科用図書採択における調査研究資料を活用することが、4月11日の教育委員会で決定されております。

資料1といたしまして、平成27年度の審議会からの答申資料を用意いたしましたので、ご覧ください。

なお、変更点の詳細につきましては、資料2でご確認いただければと思います。説明は以上でございます。

教育長 質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

高野委員 現在、中学校で使用されている教科書等について、特段、現場の方から使いづら、あるいは問題があるというようなご意見はありますでしょうか。

指導室長 現在使われている教科書等につきまして、学校から特段のお話はいただいておりません。各学校で適切に授業が実施されていると認識しております。

教育長 そのほか、いかがでしょうか。

(なし)

教育長 それでは、お諮りします。

採択事項(2)「令和2年度区立中学校使用教科用図書(道徳を除く)」については、「国語」、光村図書出版、「書写」、光村図書出版、「社会(地理的分野)」、帝国書院、「社会(歴史的分野)」、帝国書院、「社会(公民的分野)」、日本文教出版、「地図」、帝国書院、「数学」、東京書籍、「理科」、東京書籍、「音楽(一般)」、教育出版、「音楽(器楽合奏)」、教育出版、「美術」、日本文教出版、「保健体育」、大修館書店、「技術・家庭(技術分野)」、東京書籍、「技術・家庭(家庭分野)」、東京書籍、「英語」、東京書籍。

以上を採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教育長 それでは、そのように決定します。

次に採択事項(3)令和2年度区立中学校使用教科用図書(道徳)について、審議します。

指導室長から説明願います。

指導室長 中学校「道徳」の教科用図書につきましては、平成30年度に採択を行い、令和元年度から2年間使用することとなっております。

引き続き、令和2年度から使用する教科用図書として採択していただきます。説明は以上でございます。

教育長 質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。よろしいでしょうか。

(はい)

教育長 それでは、お諮りします。

採択事項(3) 令和2年度区立中学校使用教科用図書(道徳)については、平成30年度に採択した「日本文教出版」を使用します。

以上を採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教育長 それでは、そのように決定します。

次に、採択事項(1) 令和2年度区立小学校使用教科用図書について、審議します。

指導室長から説明願います。

指導室長 小・中学校の教科用図書は、原則、種目ごとに4年間は同一の教科用図書を使用することとなっております。

小学校につきましては、令和2年度から新学習指導要領が全面実施されることに伴い、採択替えの採択を行っていただきます。

なお、平成30年度の文部科学省の検定を合格した教科用図書は、11教科、13種目、60発行者でした。

ただし、「信州教育出版」が発行する「理科」、「生活」の教科用図書につきましては、調査研究のために必要な見本本が、都内の教育委員会には送付されず、調査研究できませんでした。

また、答申等につきましては、参考資料をご確認いただければと思います。

それでは、種目ごとに審議をお願いいたします。

まず、「国語」でございます。

「国語」につきましては、4社でございます。

「東京書籍」、「学校図書」、「教育出版」、「光村図書出版」から採択をお願いいたします。

教育長 それでは、審議に入ります。

質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

松澤委員　まず、「国語」について、意見を述べさせていただければと思います。

現在使われている教科書が「光村図書出版」ということと、今回、学習指導要領が大幅に変わったということがございまして、その中で色々な言葉といますか、そのようなものを書いてありまして、「思考力・判断力・表現力」の育成ですとか、新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目と、主体的・対話的で深い学び、アクティブラーニングといったものが、今までの教育の分野と若干変わってきているのかという感じもして、その辺りを踏まえて、今回の教科書採択をさせていただきました。

また、教科ごとに時間数、コマ数の多い部分、そして少ない部分がある教科、そして昔からある教科と今回、英語が、新しく始まります。

それによって、集中的に学んだ方が進められるものと、平均的に1年生から6年生までを中心に学んでいくものがあるのではないかと思いますので、そのような点も、今後、考えていけたら非常に良いのではないかと考えました。

「国語」ですが、調査委員会の調査研究書と学校調査研究報告書、区民アンケートを事前にいただきまして、それらを参考にし、その中で、「東京書籍」、「光村図書出版」、「学校図書」の3社を中心に読ませていただきました。

特にスタートの段階の1年生を中心に、そして5、6年生の内容を読ませていただきまして、その中で、細かい点は皆様の意見を聞いた後に、またお話しできればと思っているのですが、バランスがとれていたということで「東京書籍」、情報を読む力など、読み解く力につながるかもしれないということで「学校図書」、発達に合わせた工夫が非常にあったことと、コミュニケーション能力、対話的なことが多く記載されているということで「光村図書出版」、その3つを比較して、今回の採択では、「光村図書出版」を推薦したいと考えております。

青木委員　今、松澤委員からあったお話に合わせて、今回の教科書採択で非常に重要なポイントということで注目させていただいたのは、学習指導要領の改訂の中で、3つの柱という形で言われているお話、例えば、何を理解しているか、何ができるかというような意見、それから理解していることやできることをどう使えるかというお話です。

そして、社会や世界との関わりにつなげる力、その辺りが特に「国語」の中では重要なポイントになってくるのではないかと思います。

それと合わせて大事なのは、現場の先生方の教え方や伝え方、このようなところが、今申し上げました、どのように理解して、応用できるかというところにつながってきます。この辺りを、それぞれの子どものレベルに合わせた形で考えないといけないという点で見させていただきました。

いくつか見させていただいて、注目したのが、裏の表紙のところに、「保護者の皆様へ」という文言が書いてある教科書が、2社ほどございました。

今、大事なのは子どもだけではなく、保護者の皆様が、学習指導要領改訂とい

うもの自体をしっかりと理解したうえで、子どもの学びに対して、ご家庭で支援ができるかということが大事なのではないかという思いがあったものですから、ここに目がとまりました。

2社ほど、「保護者の皆様へ」という文言を読ませていただいて、そのうえでという形になりますが、あとは松澤委員がおっしゃっていた意見と大きくは変わりません。

見させていただいた中では、現場の先生が教えやすいということで情報量、それから子どもに考えさせるという意味合いで、理解を補助できるような工夫がしてあるかという点で、まだ少し悩んでいる部分はありますが、「光村図書出版」と「東京書籍」、この2社に注目させていただいているところです。

あとは、各委員の意見を伺ってから、最終的には判断したいと思っています。

長沼委員 初めに、「国語」だけではなくて、全てに関わる選定のうえで私が考えたこと、観点についてお話しします。

4つございます。

1つ目は、松澤委員がおっしゃっていましたが、新しい学習指導要領の特徴をしっかりと捉えていくというところを見ることだと思いますが、どの教科のどの教科書も、非常に丁寧に説明がなされておりました。

それは、学習指導要領が、今回、子どもに身に付けさせる資質・能力を明らかにするという教育を全ての教育活動で行うということがあり、主体的・対話的で深い学びを実現するということがありますから、いわゆる内容だけではなくて、方法論、あるいは学習のプロセスについても踏み込んで書かれています。したがって、どの教科も学習指導要領の解説が非常に分厚くなっておりまして、ある意味では丁寧です。

それをご覧になって教科書会社の方々は教科書を作成されたのですから、非常に分かりやすい、より丁寧に子どもに分かりやすい記述になっていたと思います。

その点をどのように各教科で見ていくかということがありますが、一方で、いわゆる説明が多過ぎると、子どもたちは、「思考力・判断力・表現力」の思考力の部分ですが、考えるときにその行間を埋めていくという作業ができるかどうかというのも大事ですので、バランスとといいますか、説明がたくさんあるということと、説明は少なくとも、そこを考える場面とすること、先生と一緒に子どもたちが考えるというのも授業の中では大事にする場面もあるので、そのバランスも考える必要があるというのが1つ目のお話です。

2つ目は、青木委員がおっしゃったことですが、学習指導要領のもう1つの柱としては、開かれた教育課程をめざすということが掲げられています。

すなわち、家庭や地域の皆さんにも理解していただいて教育活動を進めるということですから、教科書に即して申し上げれば、教科書そのものも色々な方に手にとっていただき、評価できるものを採用するということになるかと思います。

3つ目は、板橋区の実態に即して選ぶ必要があるのではないかと思います。

板橋区では、現在、「板橋区授業スタンダード」ということで、全ての教科で

分かりやすい授業に先生方が取り組んでいらっしゃるって、大変効果を上げていると聞いております。

特に、「全国学力・学習状況調査」では、その評価も上がってきているということを知っていますが、一方で、いわゆる基礎的な知識や技能が、なかなか足りていない子どももいらっしゃるという状況ですから、そうしたことを考えると、やはり教科書の記述は分かりやすいもの、そして読解力についても、これから重視していくということですので、読み解く力をしっかりと身に付けられる教科書を選ぶ必要があると考えています。

最後に、4つ目ですが、先生方が授業で扱うわけですから、先生方が指導しやすいものを選んだ方が良いと考えました。

若い先生からベテランの先生まで、色々な先生がいらっしゃいますが、とりわけ今回は新しい教科が入ってきたり、新しくプログラミング教育などが入ってきたりしているので、世界一忙しいと言われている中、先生方がしっかりと授業で扱いやすい教科書を選ぶ必要があると考えました。

この4つの視点で、教科書の選定を考えているのですが、一律に全て考えるということではなくて、むしろ教科の特性や特質に合わせて、この4つのうちのどれを重視するのかを考えながら選んでいく必要があると考えました。

長くなりましたが、全教科に関わることなので、冒頭に申し上げました。

そこで、「国語」でございますが、2社ありまして、まず、「東京書籍」です。

こちらは、特に低学年、とりわけ1年生において、入門期では「スタートカリキュラム」ということで言われていまして、「生活」などでも特に関わってくるのですが、どの教科もスタートカリキュラムに即して、対応して、扱っていくと子どもたちも非常に分かりやすいと思いますので、この点、丁寧に記述されていたと思います。

また、家庭や地域、あるいは「生活」や「社会」など、他教科とも連携した内容で取り組みやすいということで、「東京書籍」を推薦したいと思います。

もう1つは「光村図書出版」で、こちらは松澤委員がおっしゃっていましたが、対話の力、「主体的・対話的で深い学び」の対話的部分、これをかなり意識されていて、「国語」というのは読解力を身に付けるという視点もございますので、その点が教材の中で非常にうまく盛り込まれているという印象を持ちました。

子どもたちにとって、身の回りの文章を読み解く力も学ぶことができる教材がたくさん扱われていたと思います。

以上のことから、「東京書籍」と「光村図書出版」が良いのではと思います。

高野委員 私も、全体として「主体的・対話的で深い学び」という言葉を意識して教科書を見ていきました。

主体的ということは、授業の流れが子どもたちにとっても分かりやすいもの、対話的ということは、対話する場面やグループで話し合う場面が多く設定されているものという観点で見ました。

また、実際に授業を見に行きますと、授業時間が短いので、なかなか最後の振

り返りまでしっかりとおさまるような授業というのも難しいので、情報量があまり多くないもの、この3つの点を中心に考えてまいりました。

「国語」について、今年度、板橋区では、教科書の文章や問題文の意味、意図を正しく読み取る、読み解く力の育成に取り組んでいます。

「国語」の教科書を選ぶ際には、この読み解く力の育成に適しているかどうかという点を中心に教科書を読み比べてみました。

そして、「東京書籍」と「光村図書出版」の2社がふさわしいと思いました。

まず、「東京書籍」ですが、1年生の教科書で特につまづきの多い特殊音節について詳しく扱っております。

1年生の上の60ページの促音、つまる音、それから68ページの長音、伸ばす音、78ページの拗音、ねじれる音を、動作を伴って分かりやすく学べるようになっていきます。

促音、小さい「っ」のときは手を握る、長音、伸ばすところは手をたたいて下におろす、拗音、ねじれるところは、手をねじってたたくなどの動作をしながら読んでいきます。

実際に1年生がこの指導方法の授業を受けているところを見ましたが、子どもたちはとても興味深く、関心を持って楽しそうに学んでいました。動作をしながら、何度も繰り返して確かめていたので、教科書の内容として取り上げていくのは良いのではないかと思います。

また、言葉の力として、単元で身に付けたい力が明記されています。

3年生以上では、巻末に前学年で学習した言葉の力が、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」でまとめられています。これを6年間通して、系統的に読み解く力の育成につながる教材になっているのではないかと思います。

また、付録で、学習で使う言葉や、「ことばのひろば」で物事や人物の様子を表す言葉やつなぐ言葉、思考に関わる言葉など、様々な言葉を取り上げています。学年に応じた語彙の獲得に役立つのではないかと思います。

学習の進め方は、単元で身に付けさせたい言葉の力をつかむ「学習の見通し」、「振り返る」として、関連の学習の流れが示されています。

また、「国語」のノートのつくり方は、「めあて」と「まとめ」があり、板橋区授業スタンダードとも合っていると思います。

以上の理由で、「東京書籍」が良いのではないかと思います。

もう1社は「光村図書出版」です。

「光村図書出版」は、説明文の読み方が丁寧に学べるようになっている点がとても良いと思います。

例えば、3年生の上の47ページで、段落とその中心を捉えて読む、「感動を伝え合おう」というページでは、まず、2年生のときの「学びをたしかめよう」の説明する文章で学んだことを確認した後、練習として、「言葉と遊ぼう」という短い文章で、初め、中、終わりの文章の構造を確かめます。

その後、「こまを楽しむ」の長い文章に挑戦して、文章全体の組立てや段落の中心を捉えながら、「とらえよう」、「高めよう」、「まとめよう」と読んでい

くようになっていきます。

同じように、4年生の「アップとルーズで伝える」、5年生の「言葉の意味がわかること」などでも、同様に「学びをたしかめよう」で、前学年で学んだことを確認した後、短い文で練習して、長い説明文を読んでいくという流れになっています。

6年間を通して、難しい説明文が読めるように構成されているところは読み解く力の育成にふさわしいと思います。

また、巻末の「ことばのたまてばこ」は、考えや気持ちを伝えること、学習に用いる言葉が、まとめられていて、語彙の育成に役立っていると思います。

対話という面では、4年生の入門期の「言葉の準備運動」では、ペアやグループの対話を取り上げて、同じく4年生の対話の練習、「あなたなら、どう言う」では、役割演技による対話の力を育てています。

対話のイラストや吹出しを取り入れた話例が示されて、対話的な学びを支援する工夫があります。

また、「言葉の学びを促そう」、「学習の進め方」、「ふりかえり」を導いて、子どもが見通しを持って学ぶことができるようになっていきます。

以上の理由で、「光村図書出版」も大変すばらしい教科書だと思いました。

教 育 長 今回、教科書採択に当たって全体的に思うところがございますが、1つは、今、板橋区が小中一貫して取り扱う学習指導の中で、特に育てたい資質・能力としては、読み解く力が挙げられます。

文章をきちんと読み取って、それを自分の中で咀嚼して、話し言葉、あるいは書き言葉でアウトプットしていく、そのプロセスが読み解く力であり、さらに言えば、6つの読み解く力、リーディング・スキルといったものを育てていくということを大きな要素と考えております。

その際、もう1つ、小中一貫とともに、保幼小接続ということで、幼稚園側から小学校教育へアプローチするカリキュラム、それから小学校入学してからのスタートカリキュラム、この辺りもポイントにしていくということと、読み解く力の中では、語彙の量と質の確保ということで、本区におきましては、昨年度から、多層指導モデルを使っているということ、それから今年度に入って、リーディング・スキルテストをすることによって、子どもたちの語彙、あるいは教科書を読み解く力のアセスメントをとって指導法を考えていこうという流れがございます。

そのような指導の中で、教科書の持つ重要性というものをこれまで以上に考えていこう、そしてゴールとしては、それぞれの学年の各教科、「国語」に限らず、各教科の教科書を読み解く、きちんと理解しているといったことをめざそうという、非常に大きな目標があるということ踏まえたうえで、教科書を採択していきたいということが1つです。

そのためには、子どもたちが教科書を使って自学自習できる。つまり、学校教育の授業の中のみならず、家庭に戻ってからも、教科書を使って課題解決、ある

いは基礎・基本を習得できるような仕組みになっているのかどうかというところ、そうした意味では、やはりバーチャル的な要素というものがどうしても必要になるのではないかと思っています。

それから、昨今は、大量退職・大量採用ということで、本区においても本年度は131名の新規採用教員が入ってきているということで、教師側にとっても、教えやすさ、あるいは、ある程度、教科書の通りに進むことによって、子どもたちへの理解が図れるというようなことも当然のように考えていかななくてはならないと思っています。

また、先ほど長沼委員からもお話が出ましたように、本区におきましては、授業の基礎的な流れとして、板橋区授業スタンダードといったものがあります。

まず、本時、本単元のねらいを明示する。そして、45分間の中で、一人でじっくりと考える時間、あるいは友達と関わっていく時間、さらにはみんなでまとめ、それを振り返っていく時間、特に振り返りの明記ということが読み解く力とも関連していくのだという視点も踏まえて、教科書というものを考えてみました。

まず、「東京書籍」に関しましては、他社も意識しているとは思いますが、かなり強く、低学年、特に1年生で、幼児期からの入門期、幼児期の育ちを生かして伸ばす、つまり幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿を踏まえた、入門期の教材が非常に増えています。表現を通して一緒に学ぶということです。

つまり、保育の場合には、かなり体を動かしながら言葉と経験や体験というものをリンクさせていったものを、最初の1年生の上の部分ではかなりそこを強く意識して、イラストも入っている。いわゆる対話的な教室づくりにつなげているのだと感じます。

先ほど高野委員からもありましたように、本区においても多層指導モデルを使っていこうという中で、「東京書籍」はそれを1年生の中に取り入れております。

先ほどお話がありましたように、多層指導モデルの促音、長音、拗音について、これも今年度辺りからは、各小学校でかなり進んでいますが、小学校全校できちんと捉えていくという意味合いでは、この題材が載っているところは「東京書籍」に価値付けする点だと思っています。

また、「東京書籍」の面白いところは、例えば1年生入門期の助詞の「は」とか「へ」とか「を」のところに、あえて黄色い形で捉えて、助詞の使い方をはっきりとさせている。これはずっと3年生まで続いていくわけですが、このようなことも、読み解く力の育成にはかなり強い影響を与えていくのではないかと思っています。

そして、もう1つ。これもどの教科書会社でも書かれているのですが、読み解く力に関して、語彙というところで見えていきますと、言葉と出会い、言葉と向き合うというところで、例えば4年生の下巻を見ていただきたいのですが、81ページ、あるいは83ページ辺りに、アウトプットする際、当然のように、「なぜ」と聞かれたら「何々だから」であるとか、「例えば」といったときにはこのようにするなど、具体的な表示があるのと、自分が思うという部分と、なぜというふうに分かれたその理由といったものが、見開きできちんと考えと理由の関係

を捉えるといったようなことが載せられていたり、先ほど高野委員からありましたように、言葉のひろば、語彙の量を増やしていくということでは、きちんとそれが捉えられていると思っています。

また、実は、学習言語といって、各教科の専門的な言葉以外に学習で使う言葉というものの意味の理解が果たしてできているだろうかということが、今、板橋区の小・中学校の子どもたちの中での課題となっていますが、これも学習で使う言葉という大きな枠組みの中で、それぞれの学年、3年生以上のところでしっかり捉えられているというところにこの教科書の魅力を感じております。

さらに、板橋区授業スタンダードとの関連というところでは、「つかむ」、「取り組む」、「ふりかえる」というところが全ての単元の基本構成で統一されているといったところ、それから、子どもが自分で解決する時間を確保して、友達と自分の考えを交流させて、お互いの考えの良さに気づき、より良いものにしようという理念が各学年の教科書に表れていると感じています。

それから、「教育出版」も入門期の「生活」や「書写」を中心としたスタートカリキュラムがありますが、さらにここにはプログラミング的な思考も加える等、かなり意識的に、保幼小接続に向けた良い展開がなされていると思っています。

巻末の「言葉の木」で、言葉のまとめでは文型をうまくまとめております。

そして、「教育出版」の面白いところは、イラストや吹出しが随所に取り入れられ、子どもの学びをうまく支援をしていると思っています。

思考を整理したり、まとめたり、可視化したりするための付箋、カード、あるいはノートの使い方なども、板橋区授業スタンダードにはうまくつながっていると思っています。

それから、6年生の下巻の24ページのところには、中学校での「古典」の学習にうまくつなげていくため、小倉百人一首や古典作品を扱った単元も載せられていて、この辺りも興味深いと思いました。

それから、「光村図書出版」については、これまで出ていますように、入門期の内容については、ペアやグループの対話を取り入れています。

対話の力を育む教材といったものも、「あなたならどう言う」というような、2年生くらいの教科書にも表れていますが、「光村図書出版」は、基本的には、最初は文字が入らず、入門期は絵をうまく多用しているというところも工夫されていると思っています。

それから、「光村図書出版」は、語彙という部分の意識としては、最後に見開きで、「言葉のたからばこ」という形、これは各社使っているのですが、このようなものも、板橋区のめざす読み解く力、語彙力の獲得というものではうまくつながるのではないかと感じています。

それから、物語文の単元の扉に、単元の目標や教材面の内容を予感させるリード文がうまく使われていると思っています。

そして、「国語の学びをみわたそう」、「学習の進め方」、「ふりかえり」を位置付けていて、このようなところも板橋区授業スタンダードに沿っているものなのではないかと感じています。

それから、「光村図書出版」は他教科の教育課題との関連が図られていて、5年生では「算数」でグラフや式を用いたところ、4年生では「ランドセルは海を越えて」などといったようなことも、意識的にされているのではないかと考えています。

見通しをもって学んで、学んだことを確認できるよう、目標と振り返りが明示されていますし、情報の扱いに特化した、情報教材を系統的に載せているといったところもあります。

このようなことも含めて、3社を挙げましたが、今のところ、「東京書籍」を板橋区の読み解く力の育成と関連させた場合には、かなり効果的に活用できるのではないかと考えております。

各委員から、ご意見がありましたら、またお伺いしたいと思います。

松澤委員 今、各委員からのご意見を聞きまして、「東京書籍」と「光村図書出版」の意見が多かったと思います。私が感じたのは、どの教科書会社も平均してすばらしい教科書を作っていたのと同時に、会社ごとに特徴を非常に出しているということですが、その特徴が本当に読んでいかなとなかなか分かりづらいというところがあり、また、それがすばらしかつたと感じています。

「教育出版」について、教育長がお話をされておりましたが、「教育出版」は、思考力や学ぶ力を非常に重視しておりまして、「学校図書」は、読み解く力ということで、情報を読む力やプログラミングなど、ITやAIに対しても力を入れている印象がありました。

「東京書籍」は、バランスが良く、非常にすばらしく、色々なものに特化しておりましたが、少し気になった点が1つあります。

それは物語の文章の点と説明文という、先ほど教育長がお話しされていた点のところですが。私が感じたこととして、技術本になっているような気がいたしました。技術を教えるということも、もちろん必要だと思います。

言葉を伝える力であったり、「国語」という技術を習得させるものに対しては、大変特化されていますし、特に6年生の79ページに「インターネットの投稿を読む」というものがあるのですが、大変興味深い発想だと感じました。

今後、そうした文章を読むことが非常に増えてくると思うのですが、これがどのようなもので書かれているのかという、技術的なことを教えていただけるといことは大変すばらしいのではないかと感じました。そして、横断型といいますか、色々な教科との接点もありました。また、共感を仕事につなげるという意味でも非常に良かったのではないかと考えております。

それに対して、「光村図書出版」は、5年生の138ページ、統計を読むというところで、先ほどもお話でありましたが、「社会」でやるようなことを「国語」でやっていく。ただし、小学校の場合、「社会」も「国語」も教えるのは同じ先生なのではないかとも思ったのですが、「社会」と「国語」で教えるときに、教え方は何か違って来るのだろうかと考えてしまいました。

そして、高野委員がおっしゃった、同じく5年生、45ページの言葉の意味が

分かることというところが、非常に興味深かったのですが、言葉の意味というのは、日本語だけではなくて、例えば英語では、日本語の2つの言葉を1つで表している、また、中国語や韓国語ではこのように表しているなどというところが非常にすばらしかったと感じました。

そして、6年生の264ページでは、プレゼンテーションを小学生にさせている点、最終的な目標として、言葉を使って人と対話して、自分の意見をプレゼンテーションする機会というのは、将来あると思うのですが、そのようなことを既に小学校の段階で入れているということが大変すばらしかったと感じました。

そして、このようなところを踏まえて、皆様のご意見を聞きながら、板橋区ではどのようなものを選ぶのかということをもた決めていきたいと思っています。

最後に少しお話しさせていただきたいのは、私が「光村図書出版」を選んだ最大の理由は、絵と写真と言葉といったもののバランスにあります。

「光村図書出版」は、絵のタッチが1年生から6年生までで変わっていたり、例えば「モチモチの木」、「大きなかぶ」、「一つの花」というところなどを比べても、普通のタッチで描いてあるものと少しぼやかして描いてあるものがあったりします。

そのようなところが、他の教科書会社も同じようにやっている場合もありますが、そのタッチの印象がとても明るく感じました。

絵のタッチで古いものを表現するとき、少し暗くなってしまいがちなところも明るく感じるというところが、「国語」というものに特化しているのではないかと感じたので、「光村図書出版」を推薦させていただきました。

青木委員

皆様のご意見を伺っていて、私も同意見のものが多いというところと、先ほどは言葉足らずになってしまったところがあります。「東京書籍」と「光村図書出版」を候補に挙げさせていただいたのですが、例えば「教育出版」についても、掘り下げるといって、今の全体からすると、言葉が話すというところがどんどん低年齢化が進んでいる感じがしていて、少なくとも我々の時代から比べると言葉がとにかく早いというところはあるかと思えます。

ただし、言葉の意味や働きや使い方というものに着目して捉えて、例えばその関係性をとり直して、しっかりと意味を付けて言葉や文章に表したりする、その辺りは、まだ大事な話かなというくらいに感じております。

そのような意味で、先ほどお話があったように、1年生の教科書などは非常に重要だということもあろうかと思えます。

そのような点から、「教育出版」についても、深めて広げようという点では非常に工夫がされており、評価できる点が多々ございます。

それから、「学校図書」については、先ほど松澤委員からお話があったとおり、情報技術などの現代的なもの、AI、人工知能、メールの送信といったようなもの、現代的な内容を取り入れている点は非常に興味深いと思った面がございます。

ただし、今回の学習指導要領の改訂において、カリキュラムマネジメントの中で、他教科との連携というお話が取り上げられていると思ひまして、その中では、

松澤委員からご紹介があった「社会」等との連携というようなところについては、STEAM教育やSTEM教育と少しつなげようとしている動きというのも非常に興味深いと思っております。

いずれの教科書会社も良いところがあって、非常にレベルが高いというのは間違いないのですが、一方で、最初に申しあげました通り、現場の先生が教えられるかというところ、先ほど教育長がおっしゃっていた通り、新任の先生も非常に多いというところを踏まえると、テキストとして使いやすいもの、理解している、力につなげるというところは、教員の教え方の力が非常に重要になってくると思ったときに、全ての教員が使いやすいというところをどうしても強く意識せざるを得ないのではないかという感じがしています。

そのような点では、やはり「東京書籍」、多層指導モデルに活用できる教材というのが、例えば1年生の教科書等にも書いてございますし、全学年を通じてバランス良くといった点で、「東京書籍」が良いのではないかという感覚を持っております。

高野委員 「東京書籍」と「光村図書出版」を見ていて、「光村図書出版」の説明文を読むというところが、説明文の内容ではなくて、構造を読んで、発達段階に応じて難しいものも読んでいくようになるというところは、読み解く力の育成にとって、とても大事なところだと思いました。

他社についても、もう一回、確かめたのですが、文の上に、ここが導入で、ここが内容でというようなことは書いてあったのですが、やはり「光村図書出版」の、短い文で構造を練習して、すぐその後に本題の文を読むというところが、なかなか捨てがたいと思いました。

「東京書籍」は特殊音節のところを中心に見てきましたが、教育長が言われたように、他の部分でも助詞の使い方などを細かく、1年生に関しては段階的にそうした言葉の力を身に付けていくつくりになっていて、とても良いと思いました。

他の学年でも、学習の流れが分かりやすく、言葉の力ということで、この単元で何の力を身に付けていくのかという目標がしっかりしている点がとても良いと思ったので、この2社については、どちらともなかなか決め難くて、皆さんと協議の中で決めていければと思っています。

長沼委員 皆さんの話を伺っていて、色々考えました。

私からは2社ということで、「東京書籍」と「光村図書出版」を挙げさせていただいたのですが、やはりどちらも良いつくりで、甲乙つけがたいというのが率直なところでは。

どちらの教科書も、読み解く力ということについては、これを先生方がしっかりと使っていけば、子どもたちに十分に伝えられるであろうと思えますし、また、松澤委員がおっしゃった技術的な面、「言語技術」という言葉もございますが、そのようなことも、読む力だけではなくて、言葉の語彙などを活用する力も含めて、あるいは表現する力や発表する力、「国語」における4技能といっても良い

わけですが、そのようなものを、どちらの教科書会社もよく盛り込んでいるというのが私の印象です。

検定を通過しているわけですから、当たり前といえば当たり前なのですが、先ほど申し上げたように、教科書会社で丁寧に解説を読み込んで作られたと思うので、あとは、板橋区にとってどちらかというとき、例えば板橋区授業スタンダードとの親和性などで考えると、どちらがふさわしいかというところがポイントになろうかと皆さんのお話を聞いて思いました。

教 育 長 2社に絞られてきています。私自身も「東京書籍」、「光村図書出版」、双方ともに、非常に良いところがありますが、今、板橋区がめざしている方向性というところで行くと、繰り返しになりますが、子どもたちの読み解く力を育む、そのゴールは、教科書に書かれてあることを理解し、そしてそれを発信することができる、そのための言語スキルも含めた内容的なところ、それから、冒頭申し上げましたように、リーディング・スキル、あるいは多層指導モデルといったようなことを踏まえたところで、読み解く力を伸ばしていくというようなことを繰り返しお話しさせていただくと同時に、全体的に板橋区授業スタンダードにのっとって進めていく際に、これは4社とも、それぞれ合うのではないかと感じながらも、「つかむ」、「取り組む」、「振り返る」という、その統一性が出ている「東京書籍」を私は薦めたいと思っております。

高 野 委 員 今おっしゃられたように、板橋区授業スタンダードという視点で行くと、「東京書籍」の方が授業の流れが分かりやすいかと思えます。

上に言葉、単位など、そうした単元が全部しっかりと書かれていて、どのような目標で、何をやってという流れがずっとあり、4年生の上巻の46ページを見ているのですが、しっかりと言葉の力でどのようなことをやりたいのか、問題をつかんで、その後、言いたいことを整理する、友達の話を書くというように進んでいくのですが、それが46ページのところに全体の流れが書いてあります。

そして、実際の本文が始まると、左側から始まるのですが、それと同じ流れ、今どこをやっているのかということが、番号と点線によって授業の流れが可視化できるという点、これは子どもが教科書を見ていて、今、どのような目的で、どのような授業を受けていて、どのようなことをやっているのかということを目で見られるという点で、「東京書籍」の教科書はとても分かりやすく良いのではないかと思いますので、私は「東京書籍」を推薦いたします。

松 澤 委 員 皆さんのご意見をお聞きした中で、板橋区として選ぶということを考えて、ご意見をいただいたと思うのですが、私も「東京書籍」の教科書を読んで、非常にバランスがとれているということと、もう1つ感じたのは、若い先生、特に指導力がまだ十分ではないというところで、「光村図書出版」と「東京書籍」を見比べた際に、「東京書籍」の方が、先ほど高野委員がおっしゃったようなところでも指導がしやすいのではないかとという点もあったので、私も今回は「東京書籍」

で良いのではないかと感じます。

教 育 長 そろそろ意見が出尽くしたというところで、皆様方のご意見をトータルすると、「東京書籍」というところで話の方向性が決まったのではないかと思います。それでは、「国語」については「東京書籍」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、国語については、「東京書籍」を仮採択することとします。次に、「書写」の審議に入ります。

指 導 室 長 「書写」につきましては、5社でございます。「東京書籍」、「学校図書」、「教育出版」、「光村図書出版」、「日本文教出版」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

長 沼 委 員 最初に質問させていただきますが、「国語」という教科の中での「書写」ということでございますので、「国語」の採択された教科書と同じ必要があるのかどうかということをお聞きしたいと思います。

指 導 室 長 確かに「国語」という教科の中に「書写」は位置付けられておりますが、教科書を選ぶに当たりまして、同一の教科書会社を選ぶという縛り等はございません。ちなみに、小学校でいいますと、「国語」の中で「書写」を扱う時間は、年間30単位程度と定められております。

教 育 長 そのほか、いかがでしょうか。

高 野 委 員 「書写」の教科書では、各社とも、めあてが示されて、学習の見通しをもって学習に臨めるようになっていました。写真も効果的に使われていて、使いやすいものとなっています。

「日本文教出版」以外は「国語」の授業と合わせた指導ができるようになっていたので、私は「国語」で「東京書籍」を仮採択いたしましたので、「東京書籍」が良いのではないかと思います。

「東京書籍」の教科書では、最初の「学習の準備をしよう」というところで、用具の並べ方や正しい姿勢、筆記用具の持ち方などが写真で分かりやすく示されています。

また、毛筆では「トン」という始筆、「スー」という送筆、「ピタ」という終

筆が、朱色の筆で分かりやすくなっています。

さらに、各学年で生活の中で生かせる、はがきや、学校で実際に使う実験記録のほか、新聞やリーフレットなど、色々な書き方を取り上げている点も良いと思います。各社とも、内容は大きく変わらないのですが、そういうところも「東京書籍」の教科書は大変良くできていると思います。

また、「国語」の授業で、学ぶところと一致した内容もここにありますので、私は「東京書籍」が良いと思います。

青木委員 「書写」というのは、今、非常に大事な科目になってきているのではないかと、個人的には思っています。

国が推し進めている知財総合教育という考え方がありまして、それぞれの子どもたちが、自分の個性を伸ばすということで、自分で文字を書くということは、上手、下手ということではなくて、子どもの個性という中で非常に大事な道具立てになっているのではと思っております。

そのような中での「書写」という位置付けについては、コンピューターを使うような時代の中で、文字を書くということの重要性を保護者にも理解していただくということ、これは先ほどと同様で、「保護者の方へ」の書き方を見ていると、「東京書籍」は先ほど申し上げた通りなのですが、「学校図書」が非常に丁寧な書き方をしているところがありまして、私の中では「国語」と同じ教科書会社が良いという点も含めて「東京書籍」もございしますが、「学校図書」が、頭の中に少し引っ掛かっております。

長沼委員 「国語」と必ずしも同じ教科書会社でなくても良いというお話でしたが、一方で、関連性があるって、先生方も教えやすいということになると、同じ教科書会社の方が良いのかもしれないという考え方もあると思って読んでいましたので、先ほどの「国語」と同じように、「東京書籍」と「光村図書出版」のどちらかということ考えてきました。

どちらもよく考えられていますが、先ほど高野委員もおっしゃっていた「東京書籍」の学習の見通しをもってというところ、学習のプロセスを子どもたち自身が可視化して、それを見て学習に臨むというところも、「書写」についてもそのような構成になっているので分かりやすかったのと、「光村図書出版」については、毎時間めあてから始まっていてこちらも学習の見通しが示されているので、どちらが良いかと思えます。

一方で、「学校図書」や「教育出版」では、都道府県の漢字を「社会」とリンクして書かせるという、なかなかおもしろい工夫があり、これが今回強く打ち出されていて、しっかりと書けるようにしましょう、覚えましょうということで「社会」でやられるので、このようなリンクも非常に工夫されていて捨てがたいと思いましたが、やはり「国語」との関連性を考えると、「国語」で「東京書籍」が採択されるとすれば、連動した方が良いのではないかと思います。

教 育 長 学校を回っていて、感じる事なのですが、子どもたちの鉛筆の持ち方が、非常に個性的です。

鉛筆の長さという点では、鉛筆が短いことによって、その持ち方も変わってくるというところで、まず、小学校1年生の最初のところ、冒頭申し上げたように、保幼小接続ということで、幼稚園や保育所で字を書かせようということで、鉛筆の持ち方にこだわり過ぎず、とりあえず字を書くということから始め、小学校から文字を書くというときに、正しい持ち方を学ばせるというところをきちんと押さえるということ、これはどの教科書も押さえていると思っはいますが、その意味では、「東京書籍」は書きやすい持ち方というところ等について書かれていて、その中でも、左利きの子どものことも載せている気配りは評価すべき点かと思っはいますし、また、「教育出版」はお箸の持ち方と鉛筆の持ち方を関連付けていて、生活と近付けて捉えている点は面白いと思っはいました。

姿勢や書き方、鉛筆の持ち方などというのは、文字を書く場合の基本となるところで、そこをきっちり押さえていくこと、これは新しい先生が1年生を受け持つケースもあると思うので、とても重要なところではないかと思っは、「東京書籍」と「教育出版」が興味深いと思っはいます。

内容的な部分では、各社それぞれが工夫されていて、私も長沼委員と一緒に、他教科との関連ということでは、都道府県を漢字で書くといった面白い発想がある教科書会社もあります。

ただし、基本的には、やはり「国語」の教科書とのリンクということ考えたときに、やはり同じ出版社というのは、考慮すべき点の1つだと思っはしております。

松 澤 委 員 先ほどの「国語」と同じなのですが、やはり3社選んでみたのは、「東京書籍」、「光村図書出版」、「学校図書」となります。

他教科との関連というところでは、「光村図書出版」は「英語」との連携という内容がありましたので、その辺りを少し見させていただきました。

基本的に私も皆さんのご意見と近いのが、やはり「国語」の中での「書写」ということなので、「国語」がどのような教科書会社になるかということによって、若干変わるかと思っはしておりますが、先ほど挙げました3社の中であれば特に問題はないと思っはしておりますので、皆さんのご意見を聞いて、最終的に決めていきたいと思っはいます。

高 野 委 員 私も「国語」同様に、「東京書籍」と「光村図書出版」の2社を重点的に見てきたのですが、「光村図書出版」では、「書写体操」、「空書き」などという面白い取組がありました。

どこの教科書会社も、内容を比べてみたのですが、ほとんど洩れているようなところはなかったので、こうした取組は面白いと思っはいました。

ただし、「国語」の授業の中で使っていくということ考えると、やはり「東京書籍」が良いのではないかと思っはいます。

青木委員 もう一度、全部見直してみました。「東京書籍」について、他教科との連携ということでは、3年生で「実験したことを記録しよう」という内容があって、理系の人間としては非常に面白い取組だと思いました。

また、表紙のデザインについて、見直してみると、「東京書籍」では、貝殻や花など、色々なものをつないで文字を書き、イメージとして、とても面白い考え方だということも思ったものですから、皆様と同じく、「国語」との関連も含めて「東京書籍」が良いのではという思いを強くしている状況です。

教育長 「東京書籍」で1つ気になるのは、教科書の大きさです。

特に3年生から書道、習字が始まる時に、机の上に置きながらというのが、どうなのかというところは少し気になりますが、実際に使ってみて、様子を見て、今後に生かすという形で進めていければと思っております。

長沼委員 「東京書籍」で一番良いと思ったところは、ページの左側に「書写のかぎ」というのが示されていて、どのようなスキルを使うのかということが、全てのページに書かれていまして、先生にとってもこれは役に立つのではないかと思います。

今日の授業はどのようなスキルを磨くものなのかということが明確に分かるようになっていまして、非常に大きな特徴だと思いました。

教育長 それでは、「書写」については、「東京書籍」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教育長 それでは、「書写」については、「東京書籍」を仮採択することとします。次に、「社会」の審議に入ります。

指導室長 「社会」につきましては、3社でございます。

「東京書籍」、「教育出版」、「日本文教出版」から採択をお願いいたします。

教育長 それでは、審議に入ります。

質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

青木委員 まだ、まとめきれていない部分もありますが、「社会」については、3年生からということもあって、ある程度、文字の読み書きが当然できる中での考え方になると思います。

「社会」では、文字どおり、社会的な事象という意味の、例えば位置や空間の広がり、時期や時間の経過という視点、あるいは事象や相互関係というようなところに着目して捉えていくところが重要だと考えています。

例えば地図を使って、どのような位置にあり、どのように広がっているのか。

例えば歴史の分野で、なぜ始まって、どのように変わってきたのかなど、どのようなつながりがあって、違いや共通点はどのようなところにあるのかという視点で、それぞれ見ていく必要があると考えております。

いずれにしても、単に知識だけではなくて、観察という点、問題解決のための工夫などをどのように入れていくのかということも含めて、子どもに考えさせるという工夫が大事だと見ております。

3社ございますが、5、6年生が合本になっているものと分冊になっているものがある、一見、分冊になっているものの方が分かりやすい感じがありますが、全体的な今のような視点からですと、「教育出版」と「東京書籍」が板橋区授業スタンダードに当てはまっているのではないかと感じているところです。

松澤委員 私の感想といたしましては、3社ということで、非常にどこの会社も、比較がとても難しかったです。

ただし、私も青木委員と同様に「東京書籍」と「教育出版」が、先ほどの報告書と見比べても評価が高かったのも、その2つを比べ、特に5、6年生を中心に見てみました。

「東京書籍」だけが、5、6年生は分冊になっております。

区民アンケートでも、分冊でない方が良いのではないかと、振り返ることができるので1冊の方が良いのではないかとという声があったのですが、私はそこまで感じてはいませんでした。

私が見たのは、情報量が多い少ないということですが、多くて良いのか、少なくても良いのかというところで、ちょうど良いというのはなかなか難しいのかもしれないのですが、細かいところを少し分析させていただきました。

特に食糧のところ、米についてのところなのですが、5年生で、米の生産について色々見させていただいたところで、「教育出版」だけが全国を通した「こしひかり」についての内容を載せておりました。

他の2社は、庄内の「はえぬき」だったかと思うのですが、作付など、品種の変動、新品種の書き方などを載せていたという点で、「教育出版」は全国的なブランドとして、全国の中の「こしひかり」が何割という書き方をしていたのですが、他の2社は庄内の作付を書いており、そこに違いがありました。

細かい内容は皆さんのご意見を聞いてからお話ししたいのですが、6年生の、日本とのつながりの深い国という内容がありまして、「東京書籍」と「教育出版」はサウジアラビアを載せていて、「日本文教出版」はそれがなかったという点がありました。

また、「教育出版」は6年生で年表があるのですが、見開きで、とても大きくなっておりまして、それがやりづらいという声もあるかとは思いますが、私は一面で全部の年表が見られる点が非常に良かったと感じました。

それから、全体的に写真が小さくて、分量が多いということが「教育出版」にはあったのですが、「東京書籍」以外は、5、6年生で分冊になっていないので、重いという意見などもございました。

私が「教育出版」と「東京書籍」で比較してみたところ、「教育出版」の方が、そのような面で見やすいと感じました。特にグラフの描き方など、先ほどの分析のところなどでは、非常に良いのではないかと考えたので、今回は「教育出版」を推したいと思います。

長沼委員 3社のうち、「東京書籍」と「教育出版」を考えました。

まず、「東京書籍」について、「社会」というのは副読本なども利用して、板橋区、あるいは東京都など、地理的なものを含めて、教科書と併用しながらやっていくことがほとんどだと思います。

そう考えますと、これは先生方の調査委員会、小学校の先生方からの報告書には「東京書籍」については、3年生の単元でしょうか、板橋区の副読本と構成がよく似ているということで評価されていました。

そのようなことを考えますと、こちらの本を使うことによって、副読本と連動した教育、授業ができる可能性が出てくると思います。

それから、「国語」と同じように、「東京書籍」については、学習のプロセスをしっかりと押さえて、先生方が授業をできて、子どもたちも受け取って、例えば調べる、まとめる、知識、あるいは技能、さらには「思考力・判断力・表現力」等についても、しっかりと養える教科書に仕上がっていると思いました。

「教育出版」については、これは先生方からの報告書にもございましたが、1単位時間がつなぎ2ページで構成されていて、非常にやりやすいということで、恐らく新任の先生、若い先生なども授業がしやすい構成になっているのではないかと思います。

それから、内容もさることながら、字体にユニバーサルデザインという観点が入っていて、丸みがあって非常に読みやすく、子どもたちにとっても親和性のある字体になっていて、これは非常に特徴的だと思うのですが、そのような点でも子どもたちに優しい配慮がされていると考えました。

一方、「東京書籍」で良かったのは、上下巻の教科書の重さについて、先ほど松澤委員からもお話がありましたが、5年生が上下巻、そして6年生が特徴的で、上下巻ではなくて、政治国際編、それから歴史編という分け方で、これは先生方の報告書でも良い評価をされていましたし、区民アンケートでも、工夫されている点としてのご意見がありました。

上下巻という考え方については、「社会」だけではなくて、全ての教科に関わりますが、区民アンケートでも両方の意見がありました。一緒の方が検索したときに情報が行き来できて良いという考え方と、とにかく教科書が重いという考え方、これもたくさんありました。

そう考えると「東京書籍」の5、6年生の配慮というのが非常に良いと考える方も多いのではないかと思います。

ということで、甲乙つけがたく、2社、「東京書籍」と「教育出版」のどちらかと考えました。

高野委員 子どもにとって授業の流れが分かりやすく、主体的、対話的に学べるようになっていくかという点を中心に、3社の教科書を読み比べました。

その中で、私は「教育出版」がとても分かりやすく良かったと思います。

学習の流れ、進め方が、「つかむ」、「調べる」、「まとめる」、「つながる」に基づいて展開されていて、学習の見通しが持てるようになっています。

1単位時間が見開き2ページの構成になっていて、左の上の方に「この時間の間」というものがあります。そして、見開きの右下に、「次につなげよう」となっています。この次の時間へつなげていくという、この簡潔な構成がとても良いと思いました。

また、単元ごとにテーマカラーといいますか、色が決まっていて、目次のところの単元名と、この教科書の左のところの色、それから、みんなで作った学習問題など、今、何をやっているのかが同じ色で示されていて、次の単元になると色が変わるということで、とても分かりやすいと思いました。

それから、キャラクターのつぶやきが吹き出し形式になっていて、視覚的にポイントを捉えることができるようになっています。話し合う活動のページでは、キャラクターのせりふが疑問形になっていて、子どもの試行を促しています。

4年生の「健康な暮らしとまちづくり」というところを見ていたのですが、26ページから始まっていますが、話合いで出たみんなの疑問を1つの文に表して、クラス全体の学習問題を作って、その後も、単元全体を通して、この話合いで進めています。

最後の「まとめる」というところでは、自治会の人やスーパーで働く人、市役所の人など、学級内の人以外の地域の方と意見交換しているという点がとても面白いと思いました。

先ほど長沼委員がおっしゃっていたように、私も「教育出版」の教科書については、何か読みやすいと思っていたのですが、お話にあった通りユニバーサルフォントが太くて丸みを帯びていて、目にとても優しい感じがして、内容が入ってきやすいと思いました。

それから、「東京書籍」も良いと思いました。「東京書籍」については、単元の初めにめあてが示されて、「使う」、「調べる」、「まとめる」、「ふかめる」という構成になっています。

学習の進め方は「つかむ」で、疑問に思ったことや考えを話し合っ、学習問題を作り、その後、その問題について何を調べるかということも話合いで決めていくので、子どもたちにとっても学習の流れが分かりやすく、主体的・対話的な学習を進められるのではないかと思います。

先ほどからお話が出ている、6年生が分冊になっているということについては、歴史編の戦国の世から天下統一へという、74ページなのですが、学習の進め方に沿って、「つかむ」、「調べる」活動を話し合いながら進めて、「まとめる」では、学習を振り返り、グループで、まず整理をして、その後、自分の考えを書き、そして、ミニパネルディスカッションをして、他の人の意見を聞いて、改めて自分のまとめをノートに書くという、対話的で、他の人の意見や考えを聞いて、

自分の考えをもう一度見直すという、とても良い流れになっているのではないかと思います。

6年生の歴史編と政治国際編の分冊については、学習する時期に応じて使い分けられるようになっていきます。

区民アンケートでは、教科書の重さについて色々ご意見が出ていたのですが、この場合の分冊については、内容で分けているというところで、重さの軽減というところのメリットが生きてくるのではないかと思います。

歴史編の導入部では、「歴史学習の基本を押さえよう」で、歴史の学び方の解説があり、歴史への興味を持たせる導入となっている点も良いのではないかと思います。

私は「教育出版」が1番で、次に「東京書籍」という順で推薦したいと思っております。

教 育 長

読み解く力、あるいは板橋区授業スタンダードというのは、子どもたちにとってはもちろんですが、教員にとっての使いやすさというところもあります、ほとんどの委員の皆さんに言っていただきました。

まず、「東京書籍」については、巻末に学年の学習内容等、方法を振り返る一覧が掲載してあり、情報を読み取るための必要な要素を確認することが可能だと思っています。一方で、難しいところですが、先ほど松澤委員がおっしゃったように、情報量が非常に多くて、ひょっとすると読み込めない子どもたちが出てくるのではないかという危惧が少しあります。

そして、板橋区授業スタンダードについては、最初にめあてが示されていますし、問題解決のための構成もうまくつくられているのではないかと、特に「東京書籍」の場合には、深く調べる、まとめる、生かすということで統一していますし、ドラえもののマークで空間や時間、あるいは相互関係の方法といった解き方、考え方が表されているところが良いと思っています。

それから、授業の導入で学習の目標を明記してあるということと、授業の終わりに子ども自身が学んだことを振り返るといったところもなされている。

先ほど高野委員がおっしゃったように、グループ、友達との考えを話し合うという場面が写真でうまく出されていて、話し合いの場面も重視しているというのが写真やイラストを見ていると強く感じます。

5年生の下巻の「異なる立場から考えよう」などでは、自分たちにできることを選択、判断する能力を育成しようといったことが強くうたわれていると思います。

「教育出版」については、親切過ぎるという思いもなきにしもあらずといったところですが、問から展開していく流れを重視して、みんなで作った学習問題、例えば市の様子はどのように変わってきたのだろうかということに対して、この時間の問ということで、市の人口はどのように変わってきたのかと、そして、この教科書だけ、次の時間、いわゆる振り返りに行かせるという意味で、これが書いてあることが良いかどうかというのは微妙なところなのですが、振り返りと

いうことを意識させるうえでは有効な手段なのではないかと思っています。

そして、見開きで1時間というところは、特に若手の教員にとってみると、計画しやすい、授業展開をしやすい流れになっているのではないかと思います。

特に「教育出版」は、振り返る場面や視点を掲示してあって、この辺りも先ほど出たように、吹出しでそこを指摘しているところが良いと思います。

それから、「教育出版」の5年生の64ページを見ていただきたいのですが、深い学びに向けた思考ツールというものを使っています。

「社会」については、小単元の末尾に設けた「まとめるページに」というところでは思考ツールを使って捉えているところも工夫が見られています。

板橋区でも、話し合い活動、あるいは個人のまとめのときには、可視化してこうというところで、シンキングツール、思考ツールを活用しようという教材もできているのではないかと思います。

そして、内容的なところでは、5年生の167ページ、ここでもうまく思考ツール、ダイヤモンドランキングのようなものを使っています。

思考ツールがちりばめられているところも面白いと思っています。

このような感じでランキングをしている場面、こうしたものも、特に若い先生方、あるいはベテランの先生方もそうなのですが、実際にどう使うのかというのが、教科書に書かれてあって、このようなことは子どもたちにも影響して、学級活動等に結び付くというようなところも影響されるのではないかと思います。

次に、6年生の270ページですが、本当に最後のところにきて、国際協力と日本の役割についての学習を踏まえて、SDGs、持続可能な開発目標、17の目標の中から自分がこれから実行したいものということで、SDGsとESDというものは、環境都市宣言している板橋区、それから環境教育を強く打ち出している板橋区としては素敵な部分であり、これが最後にきているということは、使い方で前に持ってくることも十分可能だと思うので、この辺りは運用の段階での問題かと思っています。

それから、「日本文教出版」も、きちんと本時の内容が見開きで1つという状況になっていて、とてもかわいいと思うのは、絵がクエスチョンマークで本時の内容が、例えば沖縄県だったら、沖縄県の人々は気候に合わせてどのような暮らしをしているのだろうとめあてに書いてあって、板橋区授業スタンダードに合っているとは感じています。

ただし、文章よりも吹出しの部分が非常に強く、板橋区が進める、文章を読み解く力の育成というところでは少し疑問を感じているところですが、キーワード、語句の解説もできていますし、学び方といいますか、そのようなところの工夫、読み取るという学び方、調べ方コーナーというものがところどころにちりばめられて載せてある点も「日本文教出版」の良さなのではないかと思っています。

そうした中で、私も「教育出版」を一番目に推したいと思っています。

先ほど松澤委員がおっしゃったように、6年生の教科書で、ど真ん中にある年表、これが一見邪魔そうだと思うながらも、子どもたちにとって見ると、通年の年史と、この後ろ側にある地図がうまくミックスされていたり、歴史のナビゲー

ションのようなものが入っていて、これもうまく使うと、真ん中に入れていた辺りがまた憎いところですが、面白い企画だと思っています。

青木委員 皆様のご意見を聞きながら、他教科とのつながりという視点で見たときに、やはり「教育出版」の5年生の、例えば118ページの未来をつくり出す工業生産、170ページの未来とつながる情報、こうしたものが、やがてという話になりますが、技術や情報などということで中学校へのつながりを意識した書きぶりになっているというのが感想です。

他と比べてみても、そこに対して、例えば技術や工業につなげるための問いかけのようなものが非常に細かく入っておりまして、ここは理系的な思考としては非常に注目したいと感じました。

それから、未来につながる情報についてもそうです。IoTやAIについて、これをどのように使いこなすのかという視点で見たときに、かなりおもしろい問いかけをしているところも注目すべきところだと思います。

「日本文教出版」も同じような記述が見られますし、ここも注目したいところなのですが、全体からすると「教育出版」が良いのではないかと思います。

松澤委員 皆さんにも少しお聞きしたいところがあったので、1点目が「教育出版」と「東京書籍」の比較になりますが、「教育出版」は5年生の218ページ、「東京書籍」は5年生の下巻の114ページで同じような内容を取り上げています。

森についてのところなのですが、「教育出版」では、写真を見開きで一遍に使っているのですが、それに比べて、他の2社では小さく扱っていて、私は、逆にこのようなところが非常に「教育出版」の特徴といいますか、考えさせるところなのではないかと感じたのが1点です。

もう1点が食糧についてのところで、これから大事だと思いますが、「日本文教出版」が、5年生の70ページ、「教育出版」が、5年生の58ページ、「東京書籍」が、5年生の上巻の74ページで、同じ図なのですが、かなり書き方が違ってまして、先ほどから申し上げているように、「東京書籍」の情報量が一番多くなっています。

一方で、「日本文教出版」は、非常に分かりやすいと思います。

皆様のご意見をお聞きしたかったのですが、情報量が多いものと、ぱっと見やすいものと、「教育出版」だけが情報をわざと入れていないということなのかは分かりませんが、もし意図的だとしたら、むしろこのような形で表すという点に関しては大変良いのではないかと思ったのですが、3社で比べてみると、内容のところ若干違うのですが、先ほどの森についてのところと、今の図を見て、「教育出版」が非常に考えさせられるのではないかと感じたので、その辺りも少し考慮していただけたらと思います。

教育長 松澤委員からのご意見について、いかがでしょうか。

「教育出版」が非常に写真等をダイナミックに活用しているのは、他教科につ

いても同じ感じがします。

青木委員 森については、確かにインパクトが非常に大きく、臨場感があるといいますか、第一印象ですし、子どもたちもそれを感じると思います。

そこから何を思うかというような問いかけから始めるという意味では、考えさせるというところへの導入については、松澤委員がおっしゃったように、引き込みやすいのではないかと思います。

地図についても、もしかしたら教師の力量が問われるかもしれないのですが、うまく導けば、みんなで考える授業になっていくのではというのは、同感です。

長沼委員 松澤委員のご指摘について、妥当だと思って伺っていました。

確かに写真のインパクトは非常に大きいものを感じます。とりわけ、森林や林業などを考えている「社会」ですので、森あるいは林について、子どもたちが思いを寄せられるという点では、見開きで本当にインパクトのある写真ですから、教科書会社の思い入れがここにあるのだろうということを、私もなるほどと思って伺っていました。

それから、この職業の差をまとめるというところでは、「教育出版」は導入ですから、少し位置付けが違って、導入なので考えさせるということを目指しているのではないかと思います。

「東京書籍」はまとめるというところで、あえて、全部データを載せているという違いがあるのではないかと思います。

私が「教育出版」を推すのは、歴史学習の中で、6年生の最後で、単元をまとめるというのがいくつかありまして、その中で、例えば178ページなのですが、ここを見ていただくとお分かりのように、知識の定着をしっかりとやるという意図が明確にあります。

通常単元のまとめですと、より発展的なものを扱ったり、考えさせることが多い中で、あえてこの「教育出版」の歴史のまとめは、年号といわゆる出来事というのを全部しっかり押さえていて、こうしたところも、いわゆる知識・技能の知識の部分を「社会」でしっかりとやっていこうということを考えているのではないかと思います。

「社会」というのは、ある意味、暗記が主になってしまいがちなもので、そうではなくて、考える力を養うところが大事だと言われますが、一方で、歴史ですから、知識もしっかり定着したうえで、その知識を使って討論や発表をする、例えば、それぞれの戦国時代の武将の比較をするなどがあるので、やはりこのような知識を明確に、年号と出来事というものを学ぶというのは板橋区の子どもたちにとっては基礎学力の向上という点では良いのかと思うので、このような点から「教育出版」が良いのではないかと思います。

高野委員 今、松澤委員に言われて見ていたケースで、私は、この次の米づくりのところでも少し感じていたのですが、どこの地域の米づくりを学ぶのかというのがそれぞ

れ違うのですが、「教育出版」はそこに入る前に、まず、スーパーのチラシやお米屋さんの米袋を見て産地を子どもたちに調べさせています。

そうした身近なところから始めるので、いきなり庄内平野を調べましょうというような進め方ではなく、身近に、毎日食べているお米なのですが、その産地についてどのように捉えていくのかというときに、スーパーのチラシや米袋を見てお米の産地を調べて、そして、どこの地域を調べるのかという流れがとても良かったと思っています。

教 育 長 少し話題がそれてしまうのですが、教科書の導入部分について、「教育出版」は5年生も6年生も、最初のところで「社会」の見方や考え方、例えば6年生の3ページで、きちんと比べる、関係付ける、総合する、まとめるということで見方、考え方をきちんと押さえていて、5年生でも同じことが書かれています。

その下にノートで、この辺りはぜひ先生方にも共有していただきたいのですが、板橋区授業スタンダードに沿ったものが、標準化されていると思います。

それから、次に「社会」の学習の進め方、これはどの教科書会社も基本的には、「つかむ」、「調べる」、「まとめる」、「つなげる」というようなものですが、これも、5年生でも6年生でも記載されているというところで、学び方という点でも徹底しているというところにも「教育出版」の良さが出ているのではないかと思います。

そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、皆さんのご意見として、「東京書籍」もありましたが、「教育出版」ということでお声がそろったようですので、「社会」については、「教育出版」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「社会」については、「教育出版」を仮採択することとします。

それでは、委員会の途中ではありますが、議事運営の都合により、暫時休憩いたします。

再開は、13時としますので、よろしくお願いいたします。

(休憩 午前11時50分)

(再開 午後 1時00分)

教 育 長 それでは、委員会を再開いたします。

午後は、「地図」の審議から入りたいと思います。

指導室長から説明願います。

指導室長 「地図」につきましては、2社でございます。
「東京書籍」、「帝国書院」から採択をお願いいたします。

教育長 それでは、審議に入ります。
質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

松澤委員 私は見やすさと、他教科とのところについて見させていただきまして、今まで使っていたのが「帝国書院」ということですが、特に問題はなく、使ってみて使いやすさを感じております。

「東京書籍」についても非常に見やすくはなっているのですが、文字が大きくて少し見にくいところがあったりして、評価委員会や調査委員会のところでも若干、違いがありまして、「東京書籍」については、グラフ、統計表が少ないというところが指摘されておりまして、「帝国書院」については、歴史年表が小さい、歴史の情報が少ないというところがあり、そこに注目したのですが、私としましては、グラフなどの方が必要ではないかと感じた点、また、今まで使っていて非常に使いやすいという点から「帝国書院」が良いのではないかと思います。

長沼委員 「地図」は2社ということで、甲乙付けがたいところですが、どちらか1社を推さなければならないと感じています。

全体的に見ますと、松澤委員がおっしゃったように「帝国書院」が見やすさ、特に色合いについて、子どもたちの目に優しい色合いという配慮がされているということもありますし、「東京書籍」もそうかもしれませんが、「社会」ですら歴史の学習でも使うということ、6年生になりましても歴史学習で使うので、このようなことにも配慮がされているというところが見てとれますので、全体的には「帝国書院」が良いのではないかと思います。

ただし、1点だけ気になったことがありまして、それは「帝国書院」の61ページと62ページ、日本の首都東京というところでございまして、これについては「東京書籍」もそうなのですが、山手線を1つの基準にして、ちょうど五万分の一に収まるということだと思っておりますが、板橋区が全然出てこないのです。池袋辺りで切れてしまっている点、これが唯一、板橋区で使う際のマイナスポイントであると思いました。

一方で「東京書籍」では入ってしまっていて、全部ではないのですが、東武東上線エリア、都営三田線エリア、そして、何といても中山道が、全て点線で描かれていて、巣鴨を通り、日本橋の方に向かっていくということで、丁寧に追っていると感じます。

中山道が板橋区を通っているということが明確に分かる点、このページだけを見ると「東京書籍」を採用していただきたいと思えます。

やはり板橋区の子どもたちが使うものなので、首都東京の中に、板橋区があるのとないのとでは、大きな差があると思えます。

それから、「東京書籍」については、この首都東京というページで、これでも切れている区が逆にあります。縦長になっていまして、羽田空港まで含めて網羅されているのですが、一方で、東側や西側がやや欠けているという状態です。

「帝国書院」では、この部分が横長なので、逆に足立区、板橋区、大田区もないというようなデメリットがあり、どちらをとるかという話になります。

首都東京というページで「東京書籍」については、その上に23区という地図があるので、これで切れている区、少なくとも23区のエリアの子どもたちにとっては分かるので、ここはメリットになると思います。

教科書会社で、首都東京というときに山手線エリアで本当に良いのかということ、考えていただきたいところだと思います。

もちろん他に見ると、東京都を中心とした地図も色々あるのですが、このようなことを両社ともに感じました。

総合的に見ると「帝国書院」を推薦したいと思います。

青木委員 私も総合的には「帝国書院」の方が少し優先しているというのが今の状況です。

全体を見渡していて、まず、地図の見方というところで、地図の約束、それから地図帳の使い方という形で、それぞれ最初にあるのですが、ここを分かりやすく書いてあるのは「帝国書院」だと注目しました。

それから、他教科との連携という話になりますが、日本の自然災害の地図が入っていて、「東京書籍」ですと124ページ、「帝国書院」ですと91ページに入っています。

それぞれ非常に詳しく書いてあって、こうした歴史も踏まえて、こうした自然災害があって、さらにそれに対してどのような備えが必要なのかというところまで書いてあるのが「帝国書院」で、93ページからは防災マップづくりといったところまで踏み込んだ書き方をしています。

こうしたところは、ただ単に地図というだけではなく、関連付けという意味で、非常に情報量も多くて、他教科とのつながりを意識させるという意味で自己の興味の喚起にもつながるのではないかという点が注目点でございました。

それ以外はお2人の意見と基本的には同じでして、総合的に「帝国書院」を推薦させていただきます。

高野委員 私も地図を広げた感じで「帝国書院」の方が、色がすっきりしていて、見やすいということが、第一に印象に残りました。

「東京書籍」では、陸の高さの区分分けが細かいので、色がどうしても濃くなってしまふのに比べ、「帝国書院」では、色調がすっきりしています。

そのほか、各地の地図のページでも、できるだけ地図以外の情報は要れないようにして、地図機能に重点を置いているので、大変見やすくなっている点が良いと思いました。

それから、3年生から地図帳を使うことになるということで、導入の部分にかなりのページ数をつかって、「地図って何だろう」、「地図の約束」、「地図帳

の使い方」など、分かりやすく、詳しく説明しています。

私が特に良いと思ったのは、地図記号について、記号だけを紹介するのではなくて、その記号がどのようなところから、そうした記号になったのか、12ページですが、例えば消防署だったら、さすまたの形がこの消防署の「Y」のマークになったなど、色々と関連付けて、子どもたちが記号をただ暗記するのではなく、理由と結び付けて覚えていくと、大変覚えやすいのではないかと思います。

また、先ほども少しふれましたが、色に注目しようということで、陸の高さと地図というのが16ページにあるのですが、そこに八丈島が出ているのですが、写真で見て、それから地図で見て、さらに断面図にして高低をしっかりと見て、等高線についてこれで分かりやすく説明している点が良いと思いました。

「帝国書院」については、広く見渡す地図として、細かくない、大まかな地方についての地図が載っているのですが、3年生が使うときにはこれくらいのものが良いのではとっていて、最初に、九州から北海道までを概観し、その後で地方や都道府県の詳しい地図になっているので、ある県が日本のどの辺りに位置しているのかなどが、学び始める3年生の子どもにとっても分かりやすいのではないかと思います。

また、地形、防災、農業、工業などのページが後ろの方にあって、日本全国における農業、工業、水産業の有名な場所が出ていて、その生産物などが簡潔に記載されている点も良いと思いました。

「東京書籍」との比較で気になる点としては、歴史との関わりということで、「帝国書院」の場合は、101ページに日本の歴史と世界文化遺産ということでまとめられていて、年表が横に日本の主な出来事ということで書いてあるのですが、それに比べ、「東京書籍」の場合は、かなりページ数を使って、75ページから日本の歴史と世界の関わりを書いています。年表もそうしたものになっています。

さらに、世界遺産や歴史に関わる場所などについての地図は、「東京書籍」の方が大きく分かりやすい、写真の数も多いということで、この点については「東京書籍」の方が良いと思いました。

ただし、全体的には地図の機能に重点を置いて、情報量を絞り込んでいる「帝国書院」の方が良いと思いました。

教 育 長 私から申し上げることがなくなるくらい、皆さんにご意見をいただきました。

重複しますが、今回はまず、3年生から地図が使われるというところ、ここが1つ大きなところで、3年生の「社会」の教科書の最初にも、屋上に上って周りの様子を見るというところでは「地図」というものの捉え方はあります。

そうした意味では「帝国書院」の方が導入部分でのオリエンテーションといたしますか、そのようなものを非常に丁寧に扱っていて、フィードバックしながら、この地図学習というものが可能になるということが工夫されていて、使い勝手が良いのではないかと思います。

それから、見開いて地図を見るときに、「帝国書院」については、折り目とい

いますか、そこに字が重ならないようになっています。「東京書籍」については、その辺りに少し見づらさが残るところがありました。

これは個人的なことかもしれないのですが、「地図」というものは学習でありつつ、遊びの要素もあって、よく地名当てなどがあるのですが、これは「地図マスターへの道」というクイズ形式のものがあって、それが後ろの方に、できたら塗り潰していくというような遊びの要素も「帝国書院」には含まれているというところも面白いと思っています。

全体的に3年生を少し意識して、先ほど高野委員がおっしゃってくださったような配慮をされていると思っています。

一方で、「東京書籍」については、かゆいところに手が届くというような形で、かなり細かいところがあります。

先ほど長沼委員がおっしゃったように、私も首都東京のところに板橋区が入っていないのは、少し寂しいという気もしないでもないのですが、そうした部分的な要素は抜きにしても、かなり細かいところが出ています。

例えば世界地図と地球儀のところ、**「帝国書院」**の73ページと**「東京書籍」**の55ページを比べると、絵的には**「東京書籍」**の方が、分かりやすいと感じます。

それから、先ほどお話に出たように、歴史の部分で、**「帝国書院」**の101ページと**「東京書籍」**の75、76ページを比べる際、6年生の**「社会」**は資料集を活用する学校が多いということを考えると、ここに載っているにこしたことはないのですが、その辺りは十分にクリアできていると感じています。

それから、先ほど青木委員から出たように、日本の自然災害というところ、**「帝国書院」**と**「東京書籍」**を比べると、**「帝国書院」**では左の表を見ないと照合ができないのですが、**「東京書籍」**ではきちんとその辺り、見開きの地図を見ると、どのようなことが起こっているのかが分かるのですが、その先の発展的なところは、先ほどお話しいただいたように、**「帝国書院」**の方が、地域の地図をつくりましょうというような形になっているところを感じられました。

それぞれの良さはあるのですが、地図として、遊びの要素、学びの要素を含めてというところでは**「帝国書院」**を推したいと思っています。

皆様の意見がまとまったということで、**「地図」**については、**「帝国書院」**を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「地図」については、「帝国書院」を仮採択することとします。
次に、「算数」の審議に入ります。

指 導 室 長 「算数」につきましては、6社でございます。
「東京書籍」、「大日本図書」、「学校図書」、「教育出版」、「新興出版社啓林館」、「日本文教出版」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
 質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

長 沼 委 員 「算数」については、知識・技能も大事ですが、「思考力・判断力・表現力」、とりわけ考える力、数学的思考力といったものを養うことを重視して考え、「東京書籍」、「大日本図書」、「日本文教出版」の3社を選びました。

 「東京書籍」は、唯一、1年生の最初の第1巻、これが大きな判になっておりまして、最初に算数にふれるということで、数についての概念を学ぶときに、リード文に配慮されているということはありません。

 それから、数学的な見方、考え方というもの、これはどの学年もそうですが、しっかりとそれを考えながら問題を解いていく、あるいは概念を考えていくということが随所に見られ、そうした点を評価したいと思いました。

 それから、「大日本図書」は、ややもすると「算数」・「数学」というのは抽象的な概念になりがちなところですが、より日常的な場面や、それをイラストにして分かりやすく導入を図っていると思います。しっかりと場面設定をイラストにして表しているところなどが非常に見やすいのではないかと思います。

 それから、もちろん板橋区授業スタンダードでも使えるような構成になっているというところも、とても適合するのではないかと思います。

 「日本文教出版」は、こちらはどの教科書会社でも工夫されてはいたのですが、いわゆる既習の事項、前の学年で習ったこと、前の単元で習ったことなどとの関連性、特に前の学年で習ったことをどのように当該の学年の単元では使うのかという、学習のつながりについて、特に「算数」・「数学」というのは、既習の事項とそれを発展させて次の概念が出てくる、より高い次元から眺めると新しい概念や計算方法が出てくるというのを習熟していくというステップを踏んでいますので、より下の学年からどのようにつながってきているのかというのが見やすく、分かりやすく、先生も指導しやすくなっている方が良いでしょうということで、その点、「日本文教出版」は、先ほど申し上げたことがきちんと加味されて盛り込まれているということと、もちろん板橋区授業スタンダードにも適合する形で、めあてから、考える、学ぶ、まとめる、振り返る、この辺りのステップが、どの教科書会社もそのようなステップは学びの方法として考えられてはいるのですが、より効果的に入っているだろうということがございました。

 それで、色々と比較してみて、細かい点になってしまいますが、「算数」というのは、教えるときに先生方がなかなかその概念を教えるのが難しいというのがあるのですが、私が一番思っているのは、6年生の分数÷分数についてです。これについては、6社全て、どのような数字を使っているのか見てみました。

 「東京書籍」と「大日本図書」は、 $3/4$ デシリットル÷ $2/5$ 平方メートル、正比例なのですが、1平方メートル当たりを求めるときに $3/4 \div 2/5$ にする。

 他の4社は、分子が1で割っています。「学校図書」と「教育出版」は、 $2/5 \div 1/4$ 、「新興出版社啓林館」は、 $3/5 \div 1/3$ 、「日本文教出版」は、

$5/8 \div 1/3$ ということで、まず分子を1で割るところから始めて、その後、分子が1以外になるという一般的な数字を扱うということになって、子どものことを考えると、分子1でまず導入をしてから、一般的なものになるように段階を踏んだ方が分かりやすいとは言えますが、面積図をやったら非常に厄介なのです。

ひとたび逆数をかければ良いということが出てくると、子どもたちはもうそれで計算はできるということになるのですが、そこに至るまでに大変苦勞すると思うので、ここは分かりやすさからいいますと、もちろん好みもあるかもしれませんが、一般的に導入してしまった方が全部共通して言えるので、 $2/5$ でやった方が良いという考えもあれば、分子1で先に導入しておいて一般に入るという流れを酌んだ方が良いという考えもあり、この違いが明確に2社と4社で分かれています。

どちらが良いのか、これは先生方によるのですが、一般的に考えれば、分子1で割った方が分かりやすいということです。

ただし、この単元のこの部分だけをもって、何か、採択の評価をすることはあきませんが、参考意見ということで述べさせていただきました。

高野委員 学校で「算数」の授業を見ると、今、「算数」は少人数による学習が行われていて、子どもたちが先生の説明を聞くだけの受け身の授業ではなくて、自分の考えを発表したり、他の人の様々な考え方を聞いたり、子どもが主体的・対話的に学んでいる授業の様子をよく見かけるようになりました。

現在、板橋区で進められている授業をさらに分かりやすくブラッシュアップできるような教科書を選びたいという視点から、授業の中で問題解決が進んでいく場面が多く掲載されているものということで、私は「大日本図書」と「日本文教出版」の2社の教科書が良いのではないかと思います。

まず、「大日本図書」ですが、「算数」の学び方として、ノートの手書き方、話し方、聞き方が示されています。

「算数」の学び方は問題を自分で考えよう、また、隣同士やグループ、クラスで学び合おう、まとめよう、振り返ろうという流れになっています。

問題解決型の学習として展開したい学習内容については、教科書の端に、色付きで「問題をつかもう」など、今どこをやっているのかということが分かるような言葉が、帯のように書かれています。

黒板の前に立つ子どもたちの写真やイラストがたくさん載せられていて、自分の考えを伝える場面がかなり取り上げられています。

例えば2年生の15ページのかけ算のページ、5年生の20ページの四角形の4つの角の大きさを求める問題などでは、黒板に求め方が書かれていて、それを説明する子ども、また、他の人の考え方を説明する子どもなどの普段の授業の様子を想像させるようなものが載っていますので、子どもたちもこうしたものを身近に感じて、教科書と実際の授業が重なっていくのではないかと思います。

また、新しい単元の始まりが「新しい学習が始まるよ」というように、日常生活と関わりのある導入の仕方になっています。

3年生の、例えば小数の導入では、体温計やペットボトル、上履きなどで、36.5度や1.8リットル、21.5センチなど、まだ小数というものを勉強していなくても、既にもう自分たちが生活の中で小数を使っているのだというような導入になっています。

また、4年生の角の大きさというところの導入部分では、はさみと扇子とコンパスを、広げ方が違うと角度も違うという写真を載せてから学習に入っています。身近なところからその問題について入っていける点が良いと思いました。

さらに、各学年に長文や統計などを問題から読み取る、「読み取る力を伸ばそう」というコーナーがあります。

1年生の「たまをさがして」、4年生の「おみやげを買う」、6年生の「どの行き方がいいかな」など、色々な問題があるのですが、これは「算数」の力だけではなく、文章を読む力や背景を考える力など、様々な力が必要になってくる面白い問題だと思いました。

ぜひ、アドバンスクラスの子どもたちにはこうした問題にもチャレンジしていただきたい、「算数」だけではなく、読み解く力の育成につなげてもらいたいと思います。

もう1社は「日本文教出版」です。「日本文教出版」の場合は、新しい単元に入る前に、「次の学習のために」として、前の学年までに学んだことの問題が用意されていて、既習事項を思い出したり、確認してから新しい学習に入るようになっております。

学習の流れは、「新しい問題」、「学習のめあて」、「考え方のヒント」、「まとめ」、「しっかりチェック」となっていて、めあてやまとめなどの大切な項目の文字は赤で示されていて、分かりやすくなっています。

「学びノート」というところがあるのですが、そこではノートの書き方と学び方について、「めあて」、「見通し」、「考え」、「学び合い」、「まとめ」、「ふりかえり」というように表記されていて、板橋区授業スタンダードに沿ったものとなっています。

また、実際の教科書には、4年生の面積の求め方の工夫、5年生の体積の求め方の工夫など、図形領域では、式の意味を図を用いて説明する場面を多く取り入れています。

ここでも、黒板の前で自分の考え方を説明する写真、教室で説明を聞いている子ども達の後ろ姿の写真が入っていて、他にもペアで話し合っている写真、自分が説明するだけではなく、他の人の説明を聞いているときの姿も写っていて、そこにそれぞれのつぶやきや考えが吹き出しを使って書かれています。

それから、3年生の分数の足し算、引き算、5年生の小数の掛け算、割り算などでは、線分図やイラストが数式の意味を示しているものが多く、計算の意味が分かりやすくなっています。

以上のことから、私は「大日本図書」、「日本文教出版」の2社が良いのではないかと思います。

青木委員 皆様からのご意見、私も重なる部分がとても多いのですが、私も理系ということで、「算数」というものの教科書が、特に小学校段階で大変重要だということを常々考えています。

今回の教科書改訂では、本質の部分に、まず、論理的に考える、統合的に考える、発展的に考えるというような3つのポイントがあったと思います。

順序良く考えたり、根拠を明らかにしたり、あるいは関連付け、応用できて、新たな視点も持てるというようなところに注目させていただいております。

それから、「算数」は社会に出たら役に立たないと言っているような保護者の方も我々の時代にはおりました。それが今の時代にも仮にそうであったとすると、やはり生活に根付いた「算数」ということが非常に重要だと考えております。

よく言われているSTEM、STEAMといった教育の中でも、小学校からが良いのか、中学校からが良いのか議論がありますが、データサイエンスなどは、文系の高等教育の中でも非常に重要だという位置付けになってきています。

ですから、それを含めて、この「算数」、特に小学校段階の「算数」の基礎というのは、全ての児童がそれなりに培っていかないと、身に付けていかないとけない部分だという思いが強いので、その辺りを含めて、教科書を見させていただいております。

まず、生活に根付いているというところと、データサイエンスの要素が結構入ってきているということが今回の改訂で、個人的にかなり感じたところです。

分かりやすかったのは、例えば「日本文教出版」で、6年生の189ページ、「データを詳しく分析してみよう」というものがあります。

その前のページには、データを集め、結論を考えようといったくんだり、どのような形でデータを分析しますか、考察しますかといったようなところを、場合によっては難しい考え方になろうかと思うのですが、比較的分かりやすく説明しているのではないかと思います。

同じように、例えば「東京書籍」でも、6年生の196ページ、「情報通信技術の進化や利用について調べよう」ということで、まさに今の時代に合ったようなテーマで、それをデータで示して分析するというような流れもございまして。この辺りも非常に面白い取組だし、生活に根付いたというところは感じております。

もう1つ、非常に面白いと思ったのは、「大日本図書」の6年生の108ページ、先ほどお話に出てきた「分数の計算を考えよう」といったところで、分数の割り算の導入部分、「ペンキで何平方メートル塗れるか」というようなくんだりなど、割と生活に根付いた題材が多いという感覚を受けています。それを比較的分かりやすい解説で説明をしているのが印象に残りました。

また、「大日本図書」の「算数まなびナビ」というものが面白い取組だと個人的には思っております。

今のところ、学校の先生や区民の皆様の中では「学校図書」というご意見も出てきておりますが、個人的には、今ご紹介した3つの教科書会社というところで、皆様のご意見を聞きながら悩んでいる状況です。

松澤委員 今回の教科書に関して、「国語」と「算数」は非常に難しく、どの教科書会社を選んで良いのかと非常に迷っているところなのですが、私が教科書を読んで思ったのは、生きた授業、生きる教育というものへの変革ということを感じておりまして、先ほど青木委員がおっしゃったとおり、実際に使える数字、「算数」や「数学」といったものを、生きる教育、要するに先生がしっかり子どもたちに興味・関心を示させ、そしてそれをきちんと学ばせていけるかどうかというところを考えながら見させていただいたのですが、先ほどから出ております「大日本図書」については、プログラミングなど、新しいもの、先ほども「算数まなびナビ」いうお話があったと思うのですが、そのような面白い取組をしていたように思っておりまして、読み解く力やプログラミング教育、振り返りなどの問題を多く取り上げていたように思います。

そして、もう1社、「東京書籍」については、やはりデータや色々な計算問題の量が多いという点、また、1年生の上巻が大きくて導入に入りやすいのではないかと感じました。

それ以外では、分冊でB5判というものが多かったのと、A4判という、この2つなのですが、A4判を使っているのは1社だけだったと思います。

そのほか、「新興出版社啓林館」が非常に面白かったと感じています。わくわく算数学習など、興味を持たせるようなことをやっておられたので、興味を持ちました。

また、「学校図書」については、主体的・対話的、深い学びについて、最初のページにも書いてあり、学ぶ題材などを説明している点も興味を持ちました。

その4社を中心に読んでいたのですが、「算数」では難しい問題を簡単に解かせるというところ、簡単なのだと子どもたちに思わせるというところも必要なのではないかと思っております。

そして、問題の本質をつかむ、皆さんがおっしゃっているように、問題の意味を読み解くという力、その中でも、文字から答えを導く、文字を読んで読み解く力を養うのと同時に、先ほど青木委員もおっしゃっていましたが、線や数字、そのようなものを色々なところから読み解いていくというところ、そして、図から読み解くというところ、色々な分野でそのようなものを書いてあったと思います。

その答えを最後は分かりやすく説明していく、答えを導いた過程を説明していくというようにして、そのようなところまでいけると、次のステップに本当に行けるのではないかと思います。

細かいところは、皆さんがご意見を出された後に、またお伝えしたいと思うのですが、私は、「大日本図書」、「東京書籍」、「学校図書」、「新興出版社啓林館」の4社の中で、シンプルで非常に良いと思ったのが「新興出版社啓林館」でしたので、推させていただきますと思います。

教育長 私は、当初から申し上げているように、板橋区が進めている読み解く力、リーディング・スキルと、板橋区授業スタンダードに沿ったもの、そして子どもたちにとって自主学習がしやすいもの、また、かなりの数の新規の教員がいるわけで、

この辺りの先生方が教えやすいものというような視点で考えてみたときに、いくつか候補があるのですが、1つに言葉の定義、いわゆる推論というリーディング・スキルの中で、例えば4年生の折れ線グラフの定義を調べてみたら、「変わっていくものの様子を表したグラフを折れ線グラフといいます」と定義したのが「大日本図書」、「学校図書」、「日本文教出版」の3社です。

あとの本については、「気温のように変わっていくものの様子を表すには折れ線グラフを使います」というような、少し曖昧な定義、つまりこの辺りの言葉の使い方というものが、私には少し気になっていて、板橋区ではきちんと定義を押さえていこうと考えているところもあります。

それから、同じく4年生の割り算の中に、2つ面白いのが、「100の位に商が立たないときは、10の位から商を立てる計算をします」という、より具体的な説明と、「割られる数の一番大きい位の数が割る数より小さいときは、次の位の数まで含めた数で計算する」という説明、2つのどちらが、4年生の子どもにとって分かりやすいのか、「大日本図書」が非常に定義付けや丁寧な説明をしているということを感じています。

そして、「大日本図書」については、先ほどから出ているように、冒頭の2年生くらいからだったかと思いますが「算数まなびナビ」というものが、板橋区授業スタンダードを見事に体現している、表現しているというところで、しかもノートも、我々がめざそうとしているノート構成に近いものです。それから、話し方、聞き方のようなこともきちんと書かれている。3年生くらいから統一されているといったところも非常に魅力的であると思っています。

そのほか、同じように「日本文教出版」の教科書においても、同じようなことが言え、板橋区授業スタンダード等を含めると、「大日本図書」と「日本文教出版」の構成が非常に効果的である、子どもたちにとってみると、モデルがあるというところが非常に大きいと思っています。

もう1つ、臨場感のある構成といいますか、写真をうまく使っていると思っているのが、「大日本図書」の良さです。

計算領域の使い方、例えば1年生の108ページのところ、1年生は自分の考えを發表しましょうということで、黒板を背にした子どもたちが自分の考えをしっかりと述べている、こうした授業を子どもも教師もイメージできる、2年生に入ると、今度は自分の考えを言うだけではなく、2年生の20ページ、21ページなのですが、今度は友達の考えを説明するということでステップアップしています。

特に21ページの男の子が、「りくさんも、まどかさんも34、30と40に・・・」ということで、読み物のような形もあります。

3年生では、同じように授業場面を非常に臨場感のある形で捉えていて、良い授業を先生も学ばなくてはいけないし、子どもたちもイメージするには非常にうまく構成されていると思っています。

ただし、別冊ではないので、少し重いところ、これは「東京書籍」と同じなのですが、気になります。私は「大日本図書」のポイントは非常に細やかさと板橋

区が進めている板橋区授業スタンダードに合っているところだと思っています。それから、「日本文教出版」のスタイルもそれに近寄っているのではないかと考えています。

「東京書籍」について、本当に知恵を使っていると思ったのは、新しい算数、先ほど松澤委員がおっしゃっていたように、まさにこれは幼稚園から小学校に入学するアプローチのスタートに見事にマッチングしている形で、教科書というよりも、ドリルのような形で、特に入学する子どもたちにとっては、とても扱いやすい内容なのではないかと考えています。

そのようなところで、現時点では「大日本図書」、「日本文教出版」、「東京書籍」というようなところで考えているところです。

青木委員 皆様のご意見を伺ったうえで、少し個人的な補足です。

先ほど松澤委員から「新興出版社啓林館」のお話が出ていて、板橋区にとっても良いというところを思い出したので補足させていただくと、「新興出版社啓林館」の6年生の236ページに、板橋区出身の方がアートと「算数」という視点でお話をされているというのは、まさに文理融合というものの1つのとても分かりやすい例だと思います。

私自身、お話を伺ったことがあって、非常に面白かったので、これはこれからの教育の中に大変必要なエッセンスだと思ったものがここに体现されているので、良いテーマだという1つの例として紹介させていただきます。

皆様から出ている3社、私も悩んでいる3社の中で、最終的にずっと引っ掛かっているのは、「算数」の最終的な本質がどこにあるのかということ、どうしても身に付けてほしいものに正しい答えのあり方というものがあります。

計算で答えが出るのが「算数」だというのがほとんどになります。あるいは証明でという論理的な思考は良いのですが、最近では、理系の大学生ですら、コンピューターや電卓を叩いて出てきた数字が正しいと思って、それをそのまま結果として書いてくる子どもがいます。その答えの確認という概念がどんどんなくなってきている気がしてなりません。

そのような意味では「大日本図書」の6年生の191ページ、「およその面積や体積の求め方を考えよう」、これは他にも同じ概念はございますので、皆さん、何らかの形で書かれているのは十分に承知しているわけですが、ここに「およその」というものを求めていくことが、確認をしながら答えを出すという点で、ぜひ現場の先生たちにアピールしていただきたいところだと私は思っています。

そのような意味では、新任の方などを含めて考えると、こうした形でも単元を起こして、およそというものをまず考えたうえで計算する、あるいは確かめのためにそのおよそというものを比較してみて、確からしさというものを示すことが非常に重要なのだと個人的には思っていますので、そのような意味での「大日本図書」は、教科書としては非常に使いやすいのではないかと考えています。

長沼委員 確かに、先ほど教育長のお話を伺っていて、「大日本図書」で教室の場面が出

てきて、児童が発表する写真が出ている。それから、写真以外にもイラストで説明をする場面で、先生が説明をしたり、子どもたちが説明をして、その理由を述べるというような場面が非常にたくさん出てくるのは効果的だと思って聞いていました。

「大日本図書」の特徴は、そうしたところにあるのかと思ったのですが、「日本文教出版」は、シンプルなつくりで、ごちゃごちゃしていない印象です。説明が非常にシンプルになっていました。

私は別のところでも6社全部を比較したのですが、2年生の最初に分数を導入するところまで、全部を比較しましたら、全ての教科書会社が紙を折るということをやっています。2つ折り、そして4つ折り。

それから、ピザやケーキなどの例も出てくるのですが、一番シンプルなのが「日本文教出版」で、ピザやケーキなどは出てきません。紙を折ることで導入して、2分の1という概念をやるということで、この辺りが良いか悪いかというところでは。

シンプルな方がやりやすいか、もしくは、もう少しピザやケーキなどの例があった方が良いのかと思うと、他の3社の方が良いのかというところでは。最初に分数で出てくるのはしっかり押さえておかないと、ある種の概念といえますか、抽象的な概念も含めて子どもたちが理解しなければいけないので、そのようなところで違いがありました。

他にも色々と比較してみたのですが、紛らわしいところでは、例えば1年生の最初の引き算の繰り下がりがあります。これも6社全部を比較しましたら、全て同じでした。

13-9か、12-9で、必ず10からまず引いて、残りの3か2を足すという方法で、計算方法も同じでした。

13-9だと、3引いてからという手もあるのですが、そうではなくて、10から9を引いて残りを足すという、6社全部が同じだということが分かりました。この辺りも6社全部で非常に工夫していて大差はないかと思えます。

松澤委員 長沼委員からお話があったところですが、少し逆の意見ということで、私が「新興出版社啓林館」を選んだ理由は、先ほどお2人が話した、6年生ですと、先ほど板橋区出身の方のお話があったのですが、ページが234ページからの「広がる算数」というところで、非常に面白く共感が持てました。

他のものにも「算数」、数字を使っていけるということで、非常に大切だということが分かるのではないかと思えました。これが1点と、先ほどの5年生の112ページ、「新興出版社啓林館」で、ピザの話が出ておまして、私はピザの話があった方が分かりやすかったものですから、そうした具体例を入れている方が良いのではないかと感じましたので、その辺りの考え方は、皆様のご意見ともすり合わせていきたいと思っております。

また、「大日本図書」については、皆さんがおっしゃっているように、答えをただ出すというよりも、色々それに対してのアプローチのところで工夫がされ

ているので、そのような問題の出し方のところに工夫があったというので、私も非常に良いのではないかと感じました。

「東京書籍」については、1年生の工夫についての話もありましたが、これも皆さんのご意見とすり合わせていきたいと思うのですが、問題数が多いことで、繰り返し教えるということとデータ量が多いということで、問題のパターンが多いということも必要なかと感じたので、「東京書籍」も候補にはしてあるのですが、この3社全部に違う個性がありまして、どのようなところをこれから板橋区として選んでいかれるのか、皆さんのご意見はそのとおりだと思いますので、その辺りのところをお話しできたら良いのかと思っておりますので、ご意見をいただければと思います。

高野委員 私には2年生の九九のところを中心にしてみました。そこで、5の段まではそれほど変わらなかったのですが、6の段、7の段辺りのところを見ていくと、「日本文教出版」では、2年生の29ページ辺りで、6の段が、まずは6ずつ増えているという気付きと、足し算で 6×2 だったら、 $6 + 6$ 、 $6 + 6 + 6 +$ という考え方と、6ずつ増えているという考え方をやって、その次に、ここでは3の段の答えと比べてどうなのかという辺りを、まず問いかけ、次に、7の段のところについて、例えば7の段だったら、 7×3 を学ぶとき、 5×3 の答えと 2×3 の答えを足すと 7×3 になるという分配の法則のような学び方など、色々なことをやっています。

他の教科書を見てみたのですが、その辺りの説明がとても少なく、「日本文教出版」の場合は、大変丁寧になっていると思いました。

それから、全体として、私は「大日本図書」と「日本文教出版」を選んだのですが、先ほど教育長もおっしゃっていた、実際の授業を想定する中で、様々な気付きが子どもの言葉の中に表れていて、例えば図形問題などでも、1つの求め方ではなく、色々な求め方でできるという辺りが、かなり子どもたちにとっては、「ああ、そうか」という気付きにつながっていくのではないかと思います。

青木委員 ここでもう1つ、私が視点として入れたいと思っているのは、先ほどのおよそという概念、正確な概念が2つあるという言い方をしたと同時に、高野委員からのお話であった、例えば低学年のところで四則計算を教えるという話がありました。昨今、言われている中に、答えの出し方というのは1つではないという概念が「算数」にはあるかと思います。

その子どもに合った出し方というのが仮にあるとすると、例えば2年生の教科書にもあるように、足し算をすることで掛け算のかわりにしても、その子どもはそれがやっぱり合っているということであれば、それはそれで良いのではないかと、このことを認めるような教育の方法もあるので、こうやって覚えなければいけない、こうやって解かなければいけないというのは、難しいとは思いますが、ある意味、先生は受け入れて、その授業でやっていくような時代に入ってきたのではないかと考えていますので、その辺りも視野に入れて教科書を選定していくと

なると、そうした題材にうまくつなげられるような単元があったり、情報があつたりというのが教科書として適切なのではないかと考えていて、その辺りが1つのポイントにもなるかという気もしています。

そのような意味で見えていくと、大変情報量も多かったり、色々な問題に展開できるような視点で教科書を作っている教科書会社もあって、どれも本当に良いところが多いのですが、板橋区授業スタンダードや、これからの子どもたちに「算数」というものを嫌いにならないでほしいという私のささやかな思いとしては、「大日本図書」が使いやすいのではないかとこの感じを受けています。

教 育 長 私も、繰り返しになるのですが、「算数」・「数学」も含めてですが、もちろん基礎的・基本的な知識や技能の習得というところと、「思考力・判断力・表現力」というところ、それから学びに向かう力、この3つの資質・能力という点を捉えたときに、基礎的な知識・技能の習得というのは恐らくどの教科書も同じように取り上げていると思うのですが、「思考力・判断力・表現力」というところと板橋区の読み解く力というところを捉えたとき、全ての教科書が随分変わってきたと思うのは、巻末に語彙の説明をかなり入れてきているところでは、それまでに学んだ既習事項をきちんと押さえているというところがあります。

それから、「大日本図書」を見ていて面白いと思うのは、前学年までのまとめを振り返るマークがあつて、例えば4年生の11ページに棒グラフとなると、273ページを見なさいという形になっています。

棒グラフというのを忘れていた子どもは、そこをまた振り返ることで、その語彙の確認ができるというようなつながりができているということと、先ほどもお話ししたように、「算数」・「数学」は定義をきちんと低学年のころから押さえていくという意味合いで、「大日本図書」の作りが良いと思っています。

もう1つは、先ほど言ったように「思考力・判断力・表現力」というところで、皆さんもお考えのように、今回の全国学力・学習状況調査、あるいは来年度から始まる大学入学共通テスト等で問われているのが、考え方が正しいかどうか、そして、それはなぜなのかという説明を加えていくことです。

この点で、「大日本図書」が読み解く力を伸ばそうというコラムが各学年に入ってきました。このコラムは、もしかすると先生の問題観や指導観のようなものを振り返る良いコラムなのではないかということで、「去年から今年になって会員の数が大変増えているが、それは正しいのか、理由を説明しましょう」といったような形のコラムがちりばめられているところも、板橋区の子どもたちのために、あるいは先生方のためにも良いのではないかと考えています。

先ほど申し上げましたが、分冊になっていないので重さは気になるところですが、「算数」については「大日本図書」の構成や、板橋区のめざす、どのように学ぶのかという視点が随所にちりばめられているというところでは推薦したいと思っています。

松 澤 委 員 皆さんのお話を聞いておまして、私も少し重たいのではないかとこのことも

あって、最終的に選ばないというところもあったのですが、「大日本図書」のそのような内容が、今、教育長もおっしゃったように、読み解く力や板橋区がめざしているものに、ある程度、合致しているように思えたので、他の数社も読ませていただき、どれも本当に決めがたいですし、これだと説得をするような意見もこれ以上見つかりませんので、私も「大日本図書」でよろしいのではないかと、皆さんの意見を聞いて感じました。

教 育 長 そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、「算数」については、「大日本図書」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「算数」については、「大日本図書」を仮採択することとします。次に、「理科」の審議に入ります。

指 導 室 長 「理科」につきましては、6社でございます。
「東京書籍」、「大日本図書」、「学校図書」、「教育出版」、「信州教育出版」、「新興出版社啓林館」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

高 野 委 員 「理科」の教科書は5社あったのですが、教科書を読んでみて、学びの流れが分かりやすいという点で、まずは「東京書籍」の教科書が良いと思いました。
「東京書籍」の学びの流れ、問題解決のプロセスが明記されていて、3年生の教科書を見ているのですが、始まりが「レッツスタート」という子どもの写真から始まっていて、「レッツスタート」で問題をつかみ、それから、「調べる」、「予想しよう」、「計画しよう」、次に、「観察」、「実験」、最後に、「まとめる」となっていて、その過程が教科書の左側の線で表現されています。
「レッツスタート」で導入のページがあって、次に、「問題をつかもう」となって、その後に「考えよう」、「まとめ」というところに、横に線が引いてあり、学びの流れが大変分かりやすくなっています。
それから、「レベルアップ理科の力」というところがあるのですが、そこが3年生では問題をつかむ力、4年生では予想する力、5年生では計画する力、6年生では考察する力をつけるということに重点を置いています。

問題解決の力を育成する学習が設定されているのですが、例えば3年生の95

ページを見ているのですが、ここに「レベルアップ理科の力」と書いてあるのですが、3年生では、問題をつかむ力をつけたいということで、「レベルアップ理科の力」が設定されていて、その後、子どもたちと先生たちのイラストによる吹出しで、先生が子どもたちに問いかけ、子どもたちがそれに答えていくというような、絵と吹出しの言葉でつながっていています。

これが、3年生では問題をつかむ力、4年生では予想する力というところが重点的に、今のような形で深く説明されています。

また、単元の導入なのですが、例えば4年生では月や星の見え方など、単元の導入で身近な現象に対する思考の流れがイラストで描かれています。

6年生では植物の体の働き、54ページですが、ここの導入のところが漫画で示されています。漫画形式なので、例えば夏、喉が渇いて、子どもが水を飲んでいて、「水は大事だよ」となる。そうすると、「植物だって同じよ」と、「水をやらないと枯れてしまうよ」というような形で、導入がとても身近に感じられる、子どもたちが興味を持って導入していけるような設定がされています。

また、「東京書籍」の場合は紙面の面積が広いので、実験の写真やイラストが大きくて、大変見やすくなっています。

さらに、問題、観察、実験などの字が太く大きく示されているので、授業で自分が今、何をしているのかがよく分かるというところが良いと思います。

もう1社は「教育出版」です。

「教育出版」は、問題解決の構成として、「見つけよう」、「問題（予想しよう、計画しよう）」、「観察・実験（結果から考えよう）」、「結論（学びを広げよう）」というようになっていて、その言葉が教科書ではピンク色で大きく書かれています。ですから、子どもたちがその教科書で、どのような流れの中で、どこをやっているのかということが分かりやすくなっています。

こちらの教科書は、教師と子ども、子ども同士、教室の黒板の前で先生とたくさん子どもなど、様々な話合いの場面が設定されていて、先生や子どもがどのタイミングで話し合うのかということが分かりやすくなっています。

また、巻頭のところに、自分たちの考えを伝え合い、学び合おうというページがあります。5年生の7ページですが、このページで、自分の考えを言葉できちんと伝えて、友達の発言や意見を聞いて、しっかり「理科」の学びをつくっていきましょうというところがあって、比べる、関係付ける、見通しを持つなどの場面で話合いをすることが示されています。

各学年で大切にしたい言葉として、3年生では「比べると違いは」、4年生では「なぜなら、その理由は」、5年では「調べる条件だけ変えて」など、発達段階に応じて自分の考えを言葉で伝えられるようにしています。

また、各学年で観察カード、ノートの書き方などの例がたくさん載っています。

ノートの書き方は、例えば5年生でしたら9ページに「ノートのとり方」というところがありますが、これは先ほど言った学習の進め方に合わせてつくられています。写真もイラストも大きくて見やすく、また文字や用語、グラフなども見やすくなっています。

さらに、植物観察のところでは、3年生の71ページですが、これは板橋となっていて、右の下の写真なのですが、タブレットでホウセンカの観察をしている写真が出ていまして、今、小学校でもタブレットによる学習が進められていますので、こうした写真が載っているのも良いのではないかと思います。

青木委員 「理科」については、3年生から始まります。全体を通じて考えていることの中で、これも大前提になってしまうのですが、「理科」に関しては、小学校の先生が教える中では一番難しい教科というような認識をしておりますし、現場の先生方からもそうした意見が多くあります。

ご存じのように小学校の教員の多くは、この言い方に語弊があるかもしれないのですが、文系ご出身の先生が多いということで、「理科」の大事な部分をしっかりと教えられるのかというところで、特に新任の先生方に非常に難しさがあるという意見が多く出ているというお話でした。

そうした点からも、やはり教材として、見てすぐ児童に伝えやすいという視点が非常に重要なのではないかという思いを強くして、見させていただきました。

そうした点から言いますと、今の高野委員のお話にもあったとおり、情報量からすると、やはり大きいということも含めてですが、「東京書籍」が情報量は多くなっています。

もう1点、全体を見ていて、一目で実験などのやり方がとても分かりやすい写真や説明であるという感じがしたのは、「大日本図書」です。

現場の先生方からもそうした意見が若干出ていたということも含めて、もう1つ、情報量も本の大きさも含めて「教育出版」という3社に注目して考えていて、今のところはその3つで迷っている状況なのですが、「東京書籍」の良いところは、例えば3年生で、いわゆる「理科」としての調べ方、それから報告書といえますか、レポートといえますか、そのまとめ方について、これは「国語」や「社会」とは少し違うのだというような視点で、そこに突っ込んでいって、例えばどのように分析して、発表をどうするか、話し方をどうするか、ノートをどう書くかというようなところをきちんと教科書の中で説明している点は、非常に面白いといえますか、大事だと思いました。

それから、「東京書籍」をぱっと見てみたら、目次が裏表紙にありました。これも使いやすさとしては良いのではと思いました。ただし、大きいという意見が、現場の先生からもやはり出ているということです。

次いで「大日本図書」もそのような記述は当然ございますが、何しろ実験や現象を写真で分かりやすいという視点では「大日本図書」が分かりやすいという印象を持ちまして、さらに、どちらも甲乙つけがたいという「教育出版」を含めて考えておりますので、皆様のご意見を伺いたいと思っています。

長沼委員 「理科」は、自然現象、動植物、天体、物理など、それぞれの分野で、子どもたちが知的好奇心を持つような教材として教科書があると良いのではないかと思います。興味を持って、自然現象、動植物などに対し、より「知りたい」とい

う気持ちになる、言ってみれば仕掛けがあるような教科書が楽しいと思います。

その点では、何といても大きさも含めて「東京書籍」は写真をいっぱい使っていて、イメージがしやすいので、見て「はっ」と子どもたちがその世界に入り込みやすいと、そのことをもっと知ってみたいと思わせるといふ点では分かりやすい教科書だと思いました。

既に冒頭にありましたが、学び方というの、冒頭のところに非常に丁寧に見開き2ページにわたって、「この学び方を・・・」というところ、それから、当然その中には学びのプロセスということでしょうか、問題を把握して、観察・実験などをするためにはそれがあって、さらにまとめて深めていく、振り返っていく、そうしたことが、冒頭に掲げられているので、全ての単元でこれを生かしていくということが明確ですので、先生方もこれを見て、もう授業の指導計画というのでしょうか、これが立てられると思います。

もちろん教科書には、当然、教科書会社が出される指導書というものがあって、そのようなものをさらに見ながら先生方は授業をするのでしょうか、冒頭の「国語」のときにも申し上げたとおり、非常に丁寧なので、教科書を見れば、指導書を見なくても先生方、特に、若い先生や新任の先生でも、学び方に沿って授業を展開していくことができると思います。

これは「東京書籍」だけではなくて、それぞれの教科書会社でも言えることかと思いますが、とりわけ「東京書籍」の冒頭の学び方という項目は分かりやすかったです。

また、全体的には先生のイラスト、それから子どもたちのイラスト、それがどのような答えをするのかという反応も含めて例示されているということなので、非常にイメージしやすい教科書に仕上がっているのではないかと、これはかなり「東京書籍」の特徴ではないかと思いました。板橋区の子どもたちにも合うのではないかと思います。

もう1つは、ほぼみんな同じなのですが、「教育出版」について、こちらは同じようにイラストが出てきて、先生のイラスト、それから子どもたちの対話のイラストです。反応をそれぞれの子どもが言うのではなく、対話形式になっています。それがイラストで示されて吹出しになっているところが随所に出てきます。

つまり、対話的な学びというものを重視して、「理科」の中で、そのような授業をしやすい工夫されていると言えるのではないかと思います。

それから、写真も「東京書籍」ほどではないのですが、効果的に使われていて、それぞれの単元の中で分かりやすく、随所に挿入されておりました。

また、「理科」では当然、ある概念や事象について考えて、調べて、発表するということが多くあるわけですが、そのときに「なぜならこう思う」、「○○だからこう思う」というような表現方法が分かりやすく明示をされていて、いわゆる話型といいますか、このように表現したら良いという表現力の視点で見ても、分かりやすく表現方法が例示されているということも効果的だと思いましたので、私は以上の2社を推薦させていただきます。

松澤委員 「理科」は先ほども何度も言っているのですが、学校の先生が教えやすいというところも、やはり必要なのではないかと考えております。

青木委員からも出ましたが、文系の先生が理系を教えるという、そのようなことを考えることも必要だと感じまして、個人的な意見では、「理科」ということで、「生活」、「社会」などとも同じような観点から、視点を変えて教えていくということになっているのではないかと考えておりますので、そのような点を踏まえて見させていただきました。

皆様のご意見が全然違ってしまおうのですが、私は4社を中心に見させていただきました。まして、「東京書籍」、「大日本図書」、「新興出版社啓林館」、「学校図書」ということで見させていただきました。

調査委員会の報告書や、学校の報告書、区民アンケート等、色々見ていまして、その中で私が感じたのは、先ほどもお話にありましたが、指導書のような大変丁寧なもの、物足りなさを感じるもの、そうした2つの視点がありまして、そのどちらを選ぶかによって全く教え方の観点が違ってくるのではないかと考えております。

学校の先生によっても、スキルの差というものは出てくると思います。ベテランの先生と若手の先生で違うと思うのですが、どのような情報量の中で教えるのか。若い先生を中心に考えれば、情報量が多い方が良いのかと思いますし、ベテランや中堅より上の先生では、情報量が少ない中で自分の個性を出しながら教えていく、それが子どもたちに伝わるということの意味も必要なのではないかと考えております。

そのような2つの視点に分かれていまして、「東京書籍」は先ほどからもずっと出ているように、非常に情報量も多く丁寧で、これでもかというようなくらいの形をとっております。皆さんの評判も良いと思います。

もう1社、「大日本図書」ですが、作り込んであるというところで、その2つを評価してあります。

もう1つは、少しシンプルと言ったら聞こえは良いのですが、少し物足りないのではないかとこのところだったのですが、「学校図書」と「新興出版社啓林館」もとても良い部分があったと考えております。

全てがプログラミングについて取り入れてあります。そして、個性は色々あるのですが、1つ1つの会社ごとに特徴が出ていたと考えております。

その中で、私が一番注目したのは、やはり「理科」なので、先ほど言ったように情報量が多い方が良いのではないかと判断いたしまして、「東京書籍」と「大日本図書」を中心に読んでいきましたが、「東京書籍」は文章、分量が大変多いという印象を受けました。丁寧過ぎるというように言っている先生もいたというお話だったので、その辺りのところを評価されるのであれば、そちらも良いのではないかと考えております。

もう1社、「大日本図書」ですが、植物工場や緑のカーテンというところが出ておまして、特に6年生を読ませていただいたところ、植物工場というのは35ページに出ていたのですが、そのような大変新しい分野というのは、前からの

「理科」の教科書を見て思うのは、新しいものを教えていくような教科書会社と、ずっと同じことを教えているような教科書会社というものがあると思うのですが、植物工場なども取り入れていて、また、68ページには緑のカーテンのところもあったのですが、そちらも「大日本図書」の緑のカーテンの内容は、かなり良いのではないかと思います。

東京都内の他の色々な区市町村のところも見させていただきまして、どのようなどころを選んだら良いのかと考えて、その2社に絞り込みました。

最後に区民アンケート等で少し気になる点があったのが、5年生の生命の誕生というところがありまして、そこで女性の胸の写真が掲載されていたところがあって、そちらは少し気になりました。私としては、それは載っていない方が良いのではないかと感じましたので、「教育出版」と「東京書籍」を選ぶのをやめ、「大日本図書」を推薦したいと思います。

教 育 長 新たなご意見のところ、確かに「東京書籍」と「教育出版」の5年生の生命の誕生のところでは、母親の授乳している様子が写真として出ているというところに、松澤委員としては少し危惧されているということだと思います。

私としましては、各社色々と凝っているのですが、やはり「東京書籍」の作り方が非常に上手だと感じています。

ずっと同じことを言い続けているわけですが、読み解く力というところでは、文章の量的なものは確かに多いのですが、きちんと読み込むことで、1つ1つの単元の文章の流れというものができているということを感じています。

また、「レベルアップ理科の力」というところで、各学年で必要な情報を読み解く力を育成していると思います。それから、「理科」の見方というところで、自発的に問題解決の活動を行うことが可能になっていると思います。

「東京書籍」についても、最後の方に「学んだことを振り返ろう」、あるいは「何が分かったかな」といったようなことで、きちんと振り返るといったところも書かれていると感じました。

「理科」は、いわゆる問題解決型の流れで実験や観察をする前に、結果を予想するわけですが、そして実際に実験や観察をして、気付いたことを考察しながらまとめていくという、その流れはどの教科書にも今回は特に差異はないのではないかと思います。

そうした中で、「東京書籍」については、問題解決の過程を学びのラインでつないで、学びの流れを可視化できている。そして、3ページ構成の単元導入が、子どもの気付きを引き出して、主体的な学びを実現していると思っています。

そして、面白い点として、例えば4年生の43ページを開いていただくと、電流の部分なのですが、どの教科書も自由試行、「理科」は自由に施行させて、そこから疑問点や、同じように不思議に思うことを引き出していくわけですが、ここで大事なのは、「東京書籍」は「モーターの回る向きは何によって変わるだろうか」という問題を出しているのですが、他のところは「乾電池の向きを変えると、モーターの回る向きにはどのような関係があるだろう」という、既に課題を

具体的に示してきているというところ、自由試行の中で様々な疑問が出てきて、それを整理した1つとして、教科書に既に想定して出しているというところはあると思うのですが、ここはやはり、「モーターの回る向きは何によって変わるのか」ということに対し、「乾電池の向きによって変わる」ということ、そこを発見させていくようなプロセスを経ているのが「東京書籍」の良さだと思いますし、この構成を43ページで問題と実験をして、答えがこのページにはなく、裏面に、初めて結果やまとめが出てきているという構成になっておりまして、また、次の右側のページに乾電池のつなぎ方で、モーターをもっと早く回すにはどうしたら良いだろうかという問題のもとに実験の方法が書いてあって、そして、裏面のまた次のページにまとめや問題が出ている。このような、少し先走る、教科書によっては左のページに問題を書いて、右にもう答えが出てしまっているような構成もあるので、そのような工夫もうまくされていると思います。

私も、意見で多くあるように判が大きいと感じていました。これは「書写」のところでも話したのですが、「理科」の場合、実験などがあるので、本当にこの大きさがどうなのかというところは、採用になった場合については、今後の大きな課題になっていくのではないかと、現場の話をよく聞かないといけないという気はしています。

それから、もう1つ、「大日本図書」についてですが、「大日本図書」も非常に具体的に書いている分、少し丁寧過ぎてしまって、「東京書籍」以上に丁寧で、例えば同じく4年生の34ページを見てもらうと、「予想しよう」と言いながら予想の答えが全部載っていたり、この辺りは丁寧過ぎると思うのですが、ただし、子どもたちが実際に実習をしているときには、やり方等も非常に丁寧に書かれてあるところで、すてきな内容になっていると思っております。

松澤委員ご指摘の生命の誕生のところ、私もなかなかどうこうというわけではないのですが、発達段階的に確かに子どもたちにとっては、とても考えさせられるのかもしれないのですが、親子、母子というところで、あのような写真があることに関しては、教員の進め方によっては、それほど大きな影響が出ないのではないかと思っておりますので、私は「東京書籍」を第一として、第二に「大日本図書」を推していきたいと思っております。

高野委員　今、授乳の写真というところで、私が選んだ「東京書籍」も「教育出版」もたまたま両方載っていたのですが、何かここだけを見ると、少し子どもたちがざわついたりするかもしれないとは思ったのですが、単元の最初から順を追って学んでいって、生命の誕生というところからずっとつながって読んでいけば、それほどこれを何か変な目で見るといような形で捉えることのないように指導していただきたいし、子どもたちにもこの内容をしっかり学んでもらえれば、問題ないのではないかと思います。

私は「教育出版」と「東京書籍」を選んだのですが、全部の実験を比べてみたわけではないのですが、「東京書籍」も実験は割と簡単にできるようなものが多いと思いました。

例えば4年生の空気と体積と温度というところを比べてみたのですが、「教育出版」は143ページ、「東京書籍」は131ページですが、同じような実験なのですが、「東京書籍」の方が簡単にできる。用意する材料や手順などが、より身近なもので簡単にできているという点で、「東京書籍」の方が良いのではと思ったところです。

「大日本図書」などとも比べてみると、やはり実験の手間といいますか、準備するものなどが「東京書籍」の場合は割と他に比べると用意しやすいものでやっているという印象がありました。

青木委員　　いまだに悩んでいる状況で、「理科」には個人的に思い入れも強いのですが、松澤委員の先ほどのお話、情報量が多いということが気になっています。

やはり現場の先生たちにとって使いやすいかということと授業の学びにつながるプロセスの話、どうもそこがひっかかっておりまして、教科書に書かれたことを淡々とやっていくという方が子どもの学びにつながるのか、それとも、教員のテクニックというものに依存してしまうという面はあるのですが、気付かせといいますか、教員からあえて考えさせるという方向へ持っていくというもののどちらが子どもたちの伸びにつながるのか、これは興味、関心の観点も含めてですが、どちらが効果的なのかということに、いまだに結論が出ておりません。

ただし、最初から申し上げているとおり、小学校の先生が「理科」を教えるのはなかなか難しいという視点に立ち戻ると、皆様がおっしゃられているとおり情報量が多く、実験も手軽にできる方が良いということに至ってしまうので、皆さんと意見が同じになりますが、それが今のところの結論かと思っておりますので、「東京書籍」ということになるかと思えます。

長沼委員　　東京都の教員採用試験でも、一般の小学校枠に加えて、「理科」と「英語」が得意な先生は別枠で採用試験があるということで、それだけ「理科」が得意な先生が欲しいということの表れだと思います。「英語」もそうだと思います。

そう考えると、逆に言えば、皆さんがおっしゃっているように、不得意の方もいらっしゃるということだと思いますので、できるだけ先生方が教えやすいもの、子どもたちの興味、関心に対するものももちろんですが、指導しやすい、授業しやすいものが良いのではないかと思います。

「東京書籍」は、とにかく判が大きいのに加えて字が大きくて、当然連動しているわけですが、全体の大きさが大きいのと、実験、まとめ、問題というようなタイトルになる字が、とても大きく、見たことがないような大きなポイントで、どんと出ているので、非常に見やすく、先生が何をすれば良いのか、子どもが何を学ばば良いのかという両方とも明確ですし、それから実験というのは「理科」にはつき物でございますので、先生は当然、実験器具を用意しなければならないとなったときに、この「東京書籍」が一番見やすく、何をそろえなければいけないのかがすぐ分かる、そうした点でもメリットがあるのではないかと思いますので、先ほどの2社、「教育出版」と「東京書籍」と申し上げましたが、どち

らが良いかと言われれば、「東京書籍」が良いのではないかと思います。

松澤委員 皆様のご意見で決まったものにはもちろん従おうと思いますが、青木委員がおっしゃったような内容で、果たして教育の分野でそうした考え方で良いのかということは、最後まで疑問に思います。

なぜかといいますと、子どもたちには読み解く力や思考力、主体性など、色々なものを求めている一方で、これらは教える側の教員にも必要なものなのではないかと考えております。

ですから、今までとは学習指導要領が大きく変わって、今後10年間これでやるわけです。今後10年間ということで、これから10年後の世界を想像できるかと考えると、想像できないと思うのです。これまでの10年間とこれからの10年間とは、全然違う社会になっていくのではないかと考えております。

そのうえで必要なものを、子どもたちはこの教育を基礎にして、次の時代を生きていくわけですから、それを全てここで終わらせて良いのか。逆に、ここにはないものがあるから、もっと学ぼう、外で学ぼうという意識が出てくるかもしれませんし、そのようなときに、学ぼうという気持ちを持たせるということも1つあるのではないかと考えておりました。ただし、それが「東京書籍」ではだめだということではないと思います。

今、皆様のご意見を聞いていると、私の考えていることとは少し違っているので、今後10年間、そしてその先の子どもの将来のことを考えて、このようなお話をしましたが、私も「東京書籍」が一番見やすく、読みやすいですし、私が先生だったら授業しやすいとは思いますが、果たして今回の学習指導要領の改訂で、それを求めているのかというところをもう一度見直しながら、考えていきたいと考えております。

教育長 最後に、これは「算数」のときにもお話したのですが、「東京書籍」は少し穴あきの知識的なことを入れるところもある反面、「たしかめよう」というところ、各単元の終末のところに「どのような実験を行うとよいか」、「理由を説明しましょう」といったような思考判断、表現、あるいは読み解く力というところを意識しているまとめの部分もあるので、このようなことも含めて、今、松澤委員からご意見いただきましたが、大方の委員の方から「東京書籍」ということのでございますので、「理科」については、「東京書籍」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(はい)

教育長 それでは、「理科」については、「東京書籍」を仮採択することとします。

それでは、委員会の途中ではありますが、議事運営の都合により、暫時休憩いたします。

再開は、15時5分としますので、よろしくお願いいたします。

(休憩)

教 育 長 それでは、委員会を再開いたします。
次に、「生活」の審議に入ります。

指 導 室 長 「生活」につきましては、8社でございます。
「東京書籍」、「大日本図書」、「学校図書」、「教育出版」、「信州教育出版」、「光村図書出版」、「新興出版社啓林館」、「日本文教出版」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

松 澤 委 員 「生活」は、1年生、2年生ということですが、本の大きさが大きいものと小さいものに分かれております。

私が注目したのは、スタートカリキュラムというところで、最初の導入のところによくのページを使っている教科書を中心に読ませていただきました。

まず、「東京書籍」、「日本文教出版」、「光村図書出版」、「新興出版社啓林館」、この4つを読ませていただきまして、全体の印象からしますと、イラストや吹出し、写真、文字の説明、バランス、その点が非常に良かったのが「東京書籍」になります。

「日本文教出版」も「東京書籍」と同じような特徴がありますが、「東京書籍」の方が見やすかったという印象があります。

「光村図書出版」は写真や実物が若干少ないので、イメージしづらいのではないかと感じました。

「新興出版社啓林館」はイラスト、吹出し、写真、文字、バランスは良いのですが、少し遠い写真の角度が多いので、臨場感が伝わりにくいのではないかとという点から、私は「東京書籍」を推薦したいと思いました。

長 沼 委 員 松澤委員がおっしゃったように、「生活」は1年生、2年生ということで、特に1年生の最初の入門であるスタートカリキュラムを意識したもの、これはどの教科書会社でも意識されていますが、入学前から入学後の生活にも、よりスムーズに移行できるものを選ぶことが大前提だと思います。

それから、動植物に触れたり、いわゆる学校探検、まち探検といった探検ものが大きく2つあるのですが、そこに向けてスムーズに事前の、言ってみれば準備学習ができるだろうかという点。探検した後の振り返りの学習、あるいはまとめの学習がきちんとできるのかというような観点で見ました。

そこで、3社ありまして、1つは「東京書籍」で、これは「理科」と同じになるのですが、まず教科書が大きくて、写真が大きく、ふんだんに使われていて見

やすいということで、「理科」と同じような理由で選びました。大変見やすく、子どもたちもイメージしやすいと思います。

もう1つは「大日本図書」で、こちらはスタートカリキュラムという視点でも、冒頭の上巻といますか、1年生で使う「なかよし」という判になりますが、漫画で最初の導入をしていたり、まるで絵本のような、2ページ、3ページですが、こうしたイラストも、幼児期に親しんだ絵本の世界から徐々に学校生活に慣れていくというようなところの工夫もあって良いのではないかと思います。

それから、学校探検に行くわけですが、主に1年生になるとと思いますが、この事前の学習が丁寧に書かれていました。

例えば上巻の9ページですが「学校の中のどこに行ってみよう」ということで、しかも「失礼します」、「ありがとうございます」と部屋に入るときに、入ってから出るときのマナーというものについても、イラストで示されているところイメージしやすいですし、それから学校探検の部分も写真だけではなく、イラストもふんだんに使っていて、1年生には見やすいのではないかと思います。

もう1つは「教育出版」で、最初の上巻については導入から入っていくのですが、こちらが非常にかわいらしいイラスト、絵から入っていくような導入になっています。「生活時間が始まるよ」という6ページ、7ページですが、「教育出版」は「生活」に限らず他教科もそうなのですが、様々な子どもがいるという状況を踏まえて、このページにも6人の子どもが出ているのですが、見た目ですぐに分かるように、外国につながっているのではないかとと思われる子どもたちなども自然にクラスの中にいるということを示していて、当然、板橋区にも様々な子どもがいっぱいいますから、そうした多様性を認めていくという視点も入っていて、幼稚園、保育所だけではなく、学校に入ると様々な子どもがいるのだということを意識できるページになっているのも良いのではないかと思います。

さらに、6ページの「保護者の皆様へ」という中で、「生活」の教科目標というものの、これは全部平仮名で書かれているので、子どもたちも見るとは思いますが、保護者向けでもありながらこの6つの視点が、当然のことながら知識・技能、それから思考力・判断力・表現力等の基礎、そして学びに向かう力、人間性等となっているのですが、この中で私が興味を持ったのは、この最後の6番の「自信を持つ」というところです。これは他ではなかなかないところです。

この部分は、学びに向かう力や人間性というのを表現するのは難しいのですが、子どもたちに分かりやすく、あえてだと思いますが、「自信を持つ」という、つまり「自己肯定感」、あるいは「自己有用感」というものを大事にしているのですが、このようなものにつながる言葉をここで使っているというのは大変良いことだと思いました。

この視点でずっと2年間学んでいくということになりますから、板橋区の子どもたちが自信を持って生活できるようにするという、最初の2年間はとても大事なので、それができる教科書になっているかと思いました。

以上3社を推薦したいと思います。

高野委員 「生活」はどの教科書会社のものも、1、2年生が楽しく学べるようになっていて、選ぶのに迷いました。

その中で、1、2年生ということなので、写真やイラストが分かりやすい、文字による情報量が多過ぎないという2点で教科書を見ていきまして、私は「東京書籍」、「新興出版社啓林館」が良いと思いました。

まず、「東京書籍」は紙面の大きさがあるように、写真やイラストなどが大きくて、とても分かりやすいということです。

例えば上巻の28ページで「種をまこう」というところがあるのですが、ここで最初の左の方にアサガオ、ヒマワリのお花の写真と種があって、次のページが少し小さくなっています。そうすると、アサガオの種の横に双葉が出てきて、そうしたところが種とリンクして見えていくという工夫があり、その後、今度は花のつぼみをもう1枚めくると、つぼみの写真がさらに発芽した芽の横に出てくるということで、種と芽の写真と、お花のつぼみの写真というのがずっとつながって、そして戻すと花が見えるという写真の工夫が横並びで見られるようになっている点がとても良いと思いました。

また、観察カードや探検計画書、学習カードや作品などが掲載されていますので、発達段階に応じたカードの書き方の例をたくさん見ることができます。

次に、下巻の76ページ、ここは見つけたことを紹介しようというページなのですが、やはり2年生ということで、教室の中で話し合っていくという場面で絵で示されています。先生と子どもたちが、自分たちで調べてきたことを発表して、それに対して聞いている人たちから質問が出ます。その質問によって、次の探検ではどのようなことをさらに調べたら良いのかということが、次の右のページに書いてあります。

相手から最初に説明を聞いて、自分たちが何を考えたのか。また、そこから質問を受けて、どのように自分たちがしていけば良いのかを目的意識を持って話し合いを進めていくというところが、2年生の段階で示されていて、今後の学習につながる、とても良い点ではないかと思います。

次に、「新興出版社啓林館」ですが、私が選んだ一番大きな理由というのが、写真やイラスト、これは漫画に近いイラストなのですが、これがとてもかわいらしい印象がありまして、また、どの写真を見ても子どもたちがにこにこ笑っている写真なのです。絵も、余り現実に近い絵ではなくて、とても親しみやすい絵なので、1年生、2年生の子どもたちに身近に感じてもらえるのではないかと思います。

そして、教科書のつくりについて、左のところに「わくわく」「いきいき」「ぐんぐん」という3段階で構成されていて、上巻を見ているのですが、左のところに「わくわく」が緑色で示され、「わくわく」の活動が終わると、次にピンクの「いきいき」、そしてさらに「いきいき」の活動が終わると、今度は「ぐんぐん」で見つけたことを紹介しようという構成になっています。色で授業の流れがつかめることと、それともう1つ、それぞれ次のステップに進むときに、

右のページのところに、例えば7ページですが「みんなで学校探検しよう」というところで学校探検をして、「気になる場所があるよ」といって次に進んでいく。そして、気になる場所に行って、もっと探検したいというような流れが、この右のページの下のところ縦書きで示されている。誰でも分かりやすいのではないかと思います。

また、下巻の最後のところに3年生のステップブックというものがあります。未来に向かってということで1、2年生で学んだことをしっかりまとめています。

これは、最初のところにもあるのですが、保護者の皆様へと書いてあって、また最後のところにも保護者の皆様、先生方へとということで、子どもたちが学んだことを、ご家庭の方にもお伝えして、一緒に子どもが振り返るときに家庭で、学校で振り返るようになっている点は良いのではないかと思います。

青木委員 「生活」は1、2年生というところで、皆様からの意見にも出ているとおり、印象がとても大事なのではないかと思います。

今回の学習指導要領の改訂で、「生活」の中で大きなポイントになっているのは、現場から出てきたカリキュラムマネジメント、気付きと考えさせる教育、そして思いや願いを持って行動して振り返るといふもの、上手にこのサイクルを回すというふうなお話があったかと思えます。

そうした意味では、この教科書というのは、どちらかという参考書として扱うもので、これを見て外で遊びたい、物をつくってみたいというものにつなげていくためのきっかけづくりの本だというふうなお話があったということです。そうした意味では、1年生が見たときに、印象に残るといふことが大変重要なのではないかと思います。

そのような視点から見させていただいて、皆様の中の意見でも出ているのですが、また、他教科でも出ていましたが、やはり「東京書籍」は判が大きいこともあって、情報量も多くなっております。

巻末にある「かつどうべんりちょう」や「ぼけつとずかん」といったものも見やすく、非常に分かりやすく書いているという点で、うまく使って、これを生活の様々な応用面につなげていけそうな気がしています。教科書も楽しそうです。

また、同じような取組では「教育出版」も表紙からなかなか楽しそうな感じでして、例えば安全な生活という28、29ページ辺りでは、見たところ、「ああ、こういうことをすればいいんだ」といふ印象が大変残りやすいものだというふうな印象を受けて、それぞれ良いところがあるのですが、一番インパクトがあったと思うのは「大日本図書」です。

まず、「大日本図書」の上巻の表紙の「楽しい生活」といふところの絵が、立体感があってとてもかわいらしかったというのが印象に残りました。

ページをめくっていきますと、非常にインパクトがあったのは62ページです。「秋の色ってね」といふのがモノクロになっています。それで、1枚ページをめくると、ここで考えさせ、「こういう色」といふのを児童が見たときにどのような意見が出てくるのかというものが、イメージしたときにとっても楽しくなりました。

同じようにめくっていくと、みんな楽しそうで笑っているというのは他の教科書でも同じなのですが、同じく88ページに「かげとなかよし」というところがあります。このときの絵が、他と比べて大きさもそうなのですが、とても楽しそうな絵なのです。子どもたちがこれを見て、すぐにでも外に出て影遊びしたいと思えるような絵だと個人的な見解ですが、そう思って、1年生ということで、そうした、すぐに行動に移されるようなつくりが大事なのではないかと思いました。

最後の方にいくと、割とイメージで伝えるものが多いのかと思っていますと、後ろの方の巻末では「学習道具箱」というところで105ページからですが、ここが逆に細かいデータがぎゅっと詰められた形で、例えば111ページの昔遊びの挑戦など、他にもありますが、割と細かく出ていると思いました。板橋区は昔遊びというものを推奨している点も含めてですが、この3社、特に私が印象に残っているのは「大日本図書」というところです。

教 育 長 まず、「東京書籍」は今までのお話のように、非常に大きくて見やすさがあるということと、スタートカリキュラムというところを非常に強く訴えていて、最初の1ページから13ページまでは、まさに幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿がどのように発揮されるかが絵とともに掲載されているというところでは、小学校の先生方と幼稚園あるいは保育所の先生方が共有できるというような感じがしています。

それから、非常に情報が多い。一見、良いと思うのですが、入学したばかりの子どもたちにとって、この情報量というのはどうだろうか。というのも、文字をこれから習うという子どもたちに、かなり「これでもか、これでもか」というような情報量が入っていることは、少し心配なところではあります。

しかしながら、内容的には絵や写真が、「生活」全体がそうなのですが、ダイナミックに描かれているということ。それから、上巻の巻末の「ぼけつとずかん」、あるいは下巻の巻末の「かつどうべんりちょう」等においても、非常に興味深いことが書いてあります。

これは、「生活」については、保護者自身が「生活」の教科を経験している人としていない人がいる中で、保護者への啓発という意味合いで書かれていること、これも色々な教科書がそう書いてあるわけですが、「東京書籍」もこのような学習ですというようなことがきちんと描かれていると思っています。

右側のところに、「手を洗いましょう」、「うがいをしましょう」といったようなこととともに、上巻の30ページで、なかなか上手だと思ったのは、アサガオ、ヒマワリ、オシロイバナ、フウセンカズラ、マリーゴールド、ホウセンカの芽が出たところで、1枚めくるとつぼみが出てきて、そして、その次には、その様子を表しています。どれだけ読み取れるかというのは問題ではあるのですが、かなり気を使って、そして次のページには種というのが出てきて、一貫性のようなところ、読み取りやすさというのが出ているのではないかと思っています。

2つ目ですが、私も「大日本図書」です。何となくコンパクトなのですが、先ほどからお話に出ています、温かい雰囲気を感じています。

1年生の初期を考えて、とにかく文字よりも視覚に訴えているというところがこの教科書の大きな特徴なのではないかと思っています。写真とかわいいイラストといいますか、なじみのあるイラストが多く載っていますし、文字量もそれほど多くないのではないかと思います。

それから、右側にきらきら言葉、これもまさに板橋区としては語彙というところで押さえると、色々な言葉がきちんと出ています。

15ページには話し方名人と聞き方名人も含めて、そのようなきらきら言葉というものを意識しているところは読み解く力というところにもつながっていくのではないかと思っています。

3つ目ですが、私も「教育出版」です。

「教育出版」については、これは最初からの部分で、長沼委員と同じで、「保護者の皆様へ」というところに私も目がいて、他の教科書よりも少し硬い感じの説明なのですが、この会社だけはとても分かりやすい形で保護者向けにアピールをしているのではないかと思っています。

それから、学びのポケット等がありますし、出ている写真の表情、これは高野委員がおっしゃっていましたが、「新興出版社啓林館」もそうですが、「教育出版」は表情が非常に明るい。それから、一貫しているのは外国人が入ってきているというところで、今の日本の状況に非常にマッチしていると思っています。

それから、ここもやはり右側に、色々な学びのポケットということで、この後ろを見てみると、各教科等の関連ということですが、「生活」はスタートカリキュラムの中に効果的な学習ということで、他教科等との一貫性といいますか、一緒にしたカリキュラムというものをこれから板橋区でもつくっていくので、その辺りを「教育出版」は強く意識してつくっているのではないかと思っています。

全体的に、写真もとてもダイナミックに使われていますので、この辺りは「東京書籍」と比較しても遜色がないのではないかと思っています。

また、四季をうまく感じさせるイラストが描いてあって、下巻の4ページから5ページ、それから58ページから59ページなど、春夏秋冬のイラストがとてもすてきだと思っています。

どの教科書も子どもたちの様子がとても生き生きとして描かれています。私としては「東京書籍」、「大日本図書」、「教育出版」を候補として挙げたいと思っています。

松澤委員 皆様のご意見をお聞きしまして、どのようなところに視点を置くのかということで、少し違いがあるのではないかと考えていて、私はやはり1、2年生ということで、先ほどお話に出ていたような写真など、ダイナミックな感性に訴えるような教科書が良いのではないかと考えたので、今回は「東京書籍」を選んだのですが、1、2年生で果たして情感をどこまで考えられるのか、そして、学びにつながられるのかということ非常に難しいのではないかと実際は思っておりまして、その辺りの考え方において違うのかもしれない。ですから、先ほど教育長がおっしゃった「東京書籍」の上巻の30ページの「種まきして」というとこ

ろは、見やすく、しかも折り目もつけないですし、他の教科書会社は2ページや3ページにわたったり、折り目をつけたりというところがあったのですが、スムーズだったということもありますし、その写真の写りの鮮やかさなどのところを今回は評価して、「東京書籍」にさせていただいたという経緯です。

長沼委員 本当に難しいと思っております。「生活」というのは、授業としては教科書をずっと見続けて授業をするというよりも、これを見て、外へ出て、植物に触れに行く、学校探検する、まち探検する、遊ぶなどということだと思っております。そうしたことを通して学び取っていく教科書ですので、教科書はシンプルでも良いのではないかと思います。

そう考えると「大日本図書」のシンプルなつくりと、ほのぼのとする絵本のよ
うな振りから導入していくというスタートカリキュラムのような発想というものは良いのではないかと
思って、少し迷っています。

「東京書籍」も「理科」と同じで魅力的ですし、この大きさと、今、松澤委員がおっしゃったような工夫、種まきのところなどですが、このようなものも捨てがたいので、「大日本図書」と「東京書籍」とで少し迷っています。

青木委員 非常に迷っています。「東京書籍」、「大日本図書」のどちらも良いです。

個人的には、下巻も全部見て、「大日本図書」の後ろの付録も見て、113ページ辺りのこうした楽しい仕掛けなどは、やはりとても大事なのではないかと
思ってしまって、一方で情報量やつくりは「東京書籍」が良いのですが、イメージという点で、「大日本図書」が私から離れないという今の印象です。

あとは皆さんのご意見に従います。

高野委員 私「大日本図書」は割と早い段階で、良さに少し気付かず
にいてしまったのですが、今、皆さんがおっしゃったこと
で見直して、「ああ、なるほど」と思って、良い点がいっぱいあり、例えば先ほど青木委員がおっしゃっていたモノクロの写真から秋の色付いた写真など、子どもたちが「おお」と言って見るのではないかと
思いますし、私は先ほど、「新興出版社啓林館」が良いと言ったのですが、同じ理由で「大日本図書」の絵もとてもかわいくて、子どもたちになじみ深く、教科書を開くのではないかと
思っています。

ただし、「東京書籍」の迫力のある写真など、そうした点で同じく「大日本図書」を見比べてしまうと、例えば、上巻の55ページを見ているのですが、アサガオの種、フウセンカズラの種などが出ているのですが、実物の種よりも少し小さいのかと思います。

恐らく「東京書籍」の場合は種の大きさが実物大になっていると思います。ですから、そうした点で子どもたちに、例えばこの種だけのことで言ったら、想像してもらいよりもずばっとこの実物大のものをここに並べて、「ここに種を置いたら同じだね」と言っている姿が少し想像できるといいますか、そうした意味で、やはり「東京書籍」の教科書は捨てがたいかと思っております。

教 育 長 皆さんのご意見の中で、私も「東京書籍」、「大日本図書」、「教育出版」ということだったのですが、2つに絞って、「東京書籍」の良さと「大日本図書」の良さについて、もう少し検討しようと思います。この教科書については、色々ご意見もあるようですので、ダイナミックさというところでの「東京書籍」と、かわいらしさや色々な工夫、あるいは言葉といったところに意識している「大日本図書」と、さらに色々意見をいただければと思います。

「生活」の教科書ですから、先ほど長沼委員がおっしゃったように、読み込むというよりもイメージをつくって、それが体験的な活動につながっていったり、スタートカリキュラムとあって、入学したときに他教科等とどう結び付いていくかというようなことも含めて見直しをしていただいて、ご意見があればお願いしたいと思います。

松 澤 委 員 印象的なもので申し訳ないのですが、「東京書籍」の良さというところで、上巻の41ページや、その次の57ページで、バッタの写真やヒマワリの写真などがありまして、1、2年生の子どもたちがこれを見て、どこまで応えるのかは分からないのですが、印象としては良いのではないかと思います。「大日本図書」についても、色々考えられてつくられていてすばらしいと思うのですが、単純に印象として、今回は少し「東京書籍」の方が良いのではないかと思います。

「理科」では「大日本図書」を推している、そのような意味では一緒に、「大日本図書」を推していた理由は、先ほどはそのような意味なのですが、今回は1、2年生ということで、発達段階に合わせて私も少し考えてこちらを推したのですが、その辺りは皆さんのご意見をいただきながら考えたいと思います。

青 木 委 員 「東京書籍」も全部見させていただくと、大事な部分で大事なことをいくつか取り上げているところに、私もだいぶ気が付いてまいりました。

上巻の43ページからあるような約束のルール。意外に、板橋区で大事かどうかは分かりませんが、やはり大事な話だと思えますし、細かい点をよく見ると、そのようなところはかなり色々心配りされてつくられているというのは感じましたので、今日ずっと言い続けてきた、現場の先生に使いやすいという視点で見ると、「東京書籍」も良いところがたくさんあると思います。

教 育 長 私自身はそれぞれの良さを思いながら、あえて「大日本図書」の作り方の、特に何度も言うように少し驚かせたりする部分、あるいは「生活の言葉」というのがとてもひっかかっているところですが、皆さんのお声としては「東京書籍」を推す声が多いところですか。長沼委員はいかがでしょう。

長 沼 委 員 皆さんのご意見がよろしければ、私も賛成したいと思います。

教 育 長 それでは、「東京書籍」を推す声が多いということで、「生活」については、

「東京書籍」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(はい)

教 育 長 それでは、「生活」については、「東京書籍」を仮採択することとします。
次に、「音楽」の審議に入ります。

指 導 室 長 「音楽」につきましては、2社でございます。
「教育出版」、「教育芸術社」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

高 野 委 員 見比べてみましたが、2社ともピアノやリコーダーなどが大きな写真やイラストで詳しく分かりやすく説明されていました。

 共通教材の日本の歌、みんなの歌、心の歌は、歌詞の内容に沿った写真やイラストが掲載され、歌詞の中の言葉や背景など、分かりやすく簡潔にまとめられていました。

 2社とも大きな差はなかったのですが、私は子どもたちが授業を受ける際に、めあてを意識しながら音楽活動ができるという点を中心に考えて、「教育芸術社」が良いのではないかと思います。

 まず、「教育芸術社」は、各学年の巻頭に「音楽の木」というイラストがあって、1年間で、例えば歌う、聞く、つくる、演奏するという各領域でどのような活動をしていくのかということが示されて、1年間でどのようなことを勉強するのかということが見渡せるようになっています。

 6年生の教科書を見ているのですが、紙面の左のところに「歌声を響かせて心をつなげよう」というタイトルがあって、その上の方には、「明るく響きのある声で歌いましょう」、その下の方に赤で、めあてがまた書かれています。

 このように、各ページ、どのページを開いても、この単元はどのようなことを目的に活動していくのかということが非常に分かりやすく書かれています。そして、例えば赤でしたら、最初の「音楽の木」のところの「歌う」というところ、次は青でしたら、「音色を感じましょう」の「聞く」というところというように、活動の大きな目的が最初の「音楽の木」のところに戻ると、どのようなことをやっているのかが分かるようになっています。

 ですから、子どもたちが授業を受けながら、今日はどのような目的で「音楽」の時間を過ごしているのかということが、教科書を見ながら常に意識して活動が続けられるのではないかと思います。

 また、「音楽」の基礎的な力のリズムということについては、「育てよう」というアイコンで示されていて、「6年間を通して2拍子、3拍子、6拍子を感じて歌いましょう」、「リズムで仲良くなろう」、「リズム遊びをしよう」など、

少しずつ繰り返して行う継続的な活動があって、6年間でリズムについての力を育てられるようになっていきます。

さらに、子どもやキャラクターの吹出しで、創意工夫のポイントなどが分かりやすくなっていて、対話的な学習が促されています。

音楽づくりでは、ペアやグループで協同的につくる内容になっています。

例えば4年生のところでは、リズムアンサンブルというところがあって、6年生ではボイスアンサンブルということで、4年生のリズムアンサンブルではペアによる協同作業、6年生ではグループで音楽づくりの活動が続けられるようになっています。

また、新しく出てきた音符、休符や記号が、緑色の枠で示されています。

4年生の11ページの下に、付点8分音符、16分音符などが出てきていますが、これが出てきたページでこのように大きく示されています。この付点8分音符でしたら、書き方もこのように連符で描くところなるといったことが説明されていて、さらにこれが84ページに進みますということで示されていて、84ページでは、この6年間で習う色々な音符、休符、記号という表現にまとめられていて、今、付点8分音符、16分音符については4年生で習っていますので、4年生で習うものは黄色で示されて、どこでどのような音符、休符や記号を勉強したのかということが分かりやすくなっています。

授業をどのような目的で受けているのかということ、子どもが常に感じながら活動ができるという点で、「教育芸術社」が良いと思いました。

青木委員

「音楽」の今回の改訂点ということで少し伺った話が、協同を重視しますということと、バリアフリーの視点を重視しますという話がありました。また、プログラミング教育の意識をさせるという点もあるのですが、以上2つの点で見ながら、2社を比較させていただきました。

「教育出版」は、たくさん楽曲があります。それから、工夫も施されていて、非常に面白いという印象です。

ユニバーサルデザインの視点からは、教科書が途中から大きくなっているところ工夫のポイントだということに現場の先生を含めて判断されており、私もそう思いました。

そのような意味では、音楽全般を学ぼうとする点では良いかと思いました。

一方で、「教育芸術社」は、全体としてクラシックを中心に丁寧に教えるという視点で書かれていると思います。

先ほどのバリアフリーの視点で、ユニバーサルデザインというところでは、それぞれ教科書に出ているイラストの色調がかなり優しいものだったり、写真と異なる楽譜の背景が白くされていたりという形で工夫が施されているというのを感じております。

もう1つ、クラシックを中心に丁寧に教えるという中で、「教育芸術社」の4年生の教科書で、少し印象に残ったのが70ページなのですが、「ごんぎつね」が出てきまして、これは「国語」の教科書で欠かせないテーマという話を皆さん

にさせていただいた中で、この朗読なども入って、上手くつなげているところもあるのではないかと考えていて、お互いにそれぞれの中で音楽的、言語的につなげるのは、教科の連携という意味で非常に良いのではないかと考えて、印象に残りました。

そのようなトータルな見方からすると、私も「教育芸術社」が良いのではないかと考えております。

長沼委員 「音楽」につきましては、今、青木委員もおっしゃっていましたが、新しい学習指導要領では、より対話的な学びを推進しようということがあると小学校の先生方からは聞いています。

その視点で2社の教科書を見比べてみました。

どちらもそのような工夫が施されていて、見やすかったのですが、私も「教育芸術社」がよろしいのではないかと考えました。

ほとんど同じなのですが、高野委員もおっしゃっていましたが、リズムアンサンブルということで、このところで一緒になって、4年生で、ペアで協同的に学んで、楽しみながらアンサンブルをやっていくというような工夫もございましたし、それから、めあてというところで、「音楽」も同様に板橋区授業スタンダードに沿った流れで授業をやるとは思いますが、しっかりとめあてを持って取り組んで振り返るという流れが、恐らく新任の先生でも、若い先生でも、これを十分に生かしながら授業ができるといったことも良いのではないかと考えました。

学習指導要領に示されている共通教材というものがございしますが、これを全部見てみました。

これは教科書会社によってそれぞれ思い入れがあるようで、例えば6年生でいいますと「われは海の子」というのが共通教材ですが、「教育芸術社」では見開き2ページです。それに対して「教育出版」では見開き2ページにまず歌詞と海の写真が出てきて、ページをめくると、さらに学び合うということがあって、4ページ使っているということになります。

全てがそうかといいますと、そうではなくて、教材によっては逆のパターンがあって、それぞれの共通教材をどのくらいの軽重で扱うかという違いなので、それについては大きな差はなかったと考えて良いのではないかと考えます。

共通教材以外の曲というのは本当に違って、それぞれの教科書会社が、それぞれにふさわしい曲ということで掲げられているので、それぞれが特徴的で、そこに差異があるとも言えますが、取り上げられていて、その曲がどうだ、この曲があるから良い、悪いということではありませんので、その点は特に加味して選んだわけではございません。

総合的に見て、子どもの使いやすさ、先生の使いやすさ、それから「音楽」に向き合う子どもたちのことを考えているかどうかという点で、大きな差はなかったのかもしれませんが、よりふさわしいということでは「教育芸術社」を私は推薦しようと考えました。

松澤委員 「音楽」は理性と感性を考えて選ばせていただいたのですが、「音楽」では感性的に捉える傾向があるのではないかと思ったのですが、調査委員会の報告の中で、プログラミング教育ということになるのかと思うのですが、そのようなテーマではどちらがということをお聞きしたときには、やはり皆さんがおっしゃっている「教育芸術社」だということもお聞きしました。

感性的な面に関しましては、曲のジャンルが今、長沼先生もおっしゃっていたように幅広く捉えられていて、新しい歌を使っているのは「教育出版」。そして、クラシックを中心に深く掘り下げているのは「教育芸術社」というお話だったのですが、やはり「教育芸術社」は歴史上の作曲家などを取り上げていたというのが印象的でした。

また、特別支援的思考というところなどにも注目して見させていただいたのですが、それはともに取り入れていただいているということと、協働という点で、一緒に皆さんでたくさんの人とやるというのは、皆さんもおっしゃっていたように、やはり「教育芸術社」に分があったのではないかと感じました。

総合的に見て、どちらを取るかということで、いつも悩むのですが、新しい曲を取り入れていって、新しい分野、新しい曲を使いながら「音楽」を教えていくというところも良いとも思うのですが、音楽を深く追求していく。特に音を楽しむという面でも、「音楽」に関しては、今回学習指導要領が変わったことによって、私も「教育芸術社」で「音楽」を深く学んでいただき、より難しいところに行ける方には、難しい音楽に挑戦していただき、プログラムを使って音楽を簡単につくれる時代になっておりますので、そのようなことにもつながるのではないかと感じたので、今回は「教育芸術社」を推薦したいと思いました。

教育長 既に4人の委員の方々のご意見がそろっていますが、私もお話をさせていただきたいと思っています。

「教育出版」の良さというものもあると思うのですが、特に3年生以上の共通教材、先ほどもお話に出ましたが、「富士山」、「さくらさくら」、「おぼろ月夜」などについては、日本人が大切にしてきた曲として、非常に大きなダイナミックな写真を入れて、子どもたちの感性をメロディーや詩と結び付けていこうというような工夫がされていたのですが、「教育芸術社」も今回の教科書はその辺りをうまく取り込んでいるというところでは、双方それぞれに特徴が出ていると思っています。

それから、「教育出版」は、ラップなどの新たな曲やメロディーなど、指導ラインに挑戦してきているというところを感じています。

そして、個人的にはサウンドオブミュージックという題材が、音楽に非常につながっていくすてきな題材ではないかと思っていて、これはミュージカルですが、4年生で「教育出版」も入っていて、エーデルワイスというすてきなメロディーラインの歌を載せているところがあります。

それから、繰り返しになりますが、語彙というところでは、各教科書の最後に音楽を表す色々な言葉というのが「教育出版」の中に入っていて、このようなこ

とを共有して、全ての教科において言葉というものの大事さをアピールするためには、工夫があるのではないかと考えています。

また、鑑賞のところのページにも「教育出版」の工夫があって、例えば4年生の52ページ、53ページでは、右側にワークシート的な工夫をして、鑑賞したものはそのまま教育ができるようなところは「教育出版」のとても良いところだと思っています。

それから、もう1つ、リコーダーも、指の使い方については見開きのところ、77ページですが、教科書を使いながらリコーダーの指使いも一緒に見られるような形で工夫がされていて、これもまた教科書の工夫の1つなのではないかと考えています。

そして、「教育芸術社」については、既に皆さんにお話しいただいたように、音楽的なところでは、これまでの古典的な音楽などをベースにしながら音楽の深みを楽しませようという工夫が随所に見られているというところと、高野委員が最初におっしゃっていたように、めあてがきちんと明記されているということ。それから、今回のいわゆるカリキュラムマネジメントというところでは、先ほど青木委員がおっしゃっていたように、本当にどの教科書にも載っているところと、うまく「音楽」をリンクさせているような工夫が見られています。

また、4年生は琴の導入に入るのですが、和楽器である琴の指導については、詳しくここは書かれているというところがあります。

先ほどお話ししたリコーダーの使い方についても、実際にリコーダーの指使いが4年生の84ページ辺りに書かれているというのは子どもにとってはイメージしやすいのではないかと考えています。

それでは、「教育出版」の良さも本当に多くあるところがございますが、「音楽」については、「教育芸術社」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(はい)

教 育 長 それでは、「音楽」については、「教育芸術社」を仮採択することとします。次に、「図画工作」の審議に入ります。

指 導 室 長 「図画工作」につきましては、2社でございます。
 「開隆堂出版」、「日本文教出版」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
 質疑、意見等ございましたら、ご発言ください。

長 沼 委 員 まず、「開隆堂出版」ですが、学習のめあてということで、かわいらしいマークと、この3つの今回の学習指導要領の柱である考え方、これがめあてとして出されていて、これが全て分かりやすく、それぞれの單元ごとにどれに焦点を当てて学んでいくのかというものが出てきますので、先生が指導するときも、あるい

は子どもたちがそのイラストを見れば、今は何に重きを置いて自分たちは工作をしたり、絵を描いたり、鑑賞するのかということが明確ですので、非常に分かりやすい教科書になっていると思いましたが、どちらかと言えば「開隆堂出版」を推薦したいと思っています。

板橋区では、6年生で日光に移動教室に行っており、ちょうど5、6年生の下巻の48ページに日光彫というものが出てきますので、内容の関連等も図ることができるというメリットもあるのではないかと思います。

それから写真の使い方といいますか、この場合には、何といたっても物づくりということで、実際に制作をしていく1つの例示として、その作品というものが示されるわけですが、「日本文教出版」でも工夫をされていて見やすかったのですが、写真の大きさ、子どもたちが実際につくっている場面、それからでき上がっている例示のモデルとしての作品、それぞれの配置の仕方も含めて見やすさというのでしょうか、それらを考えますと「開隆堂出版」の方が授業をしやすいのではないかということでした。

小学校の先生方からの調査報告でもそのように書かれていたと思います。

そのような視点を全て加味して、「開隆堂出版」を推薦したいと思っています。

松澤委員 今、長沼委員がおっしゃったように、めあてのところの最初から「工夫」「考える」「協力する」というところで、非常に分かりやすかったので、「開隆堂出版」が良いのではないかと私も思いました。

「日本文教出版」には「ひらめきポケット」というものがあつたのですが、説明が少ないために使い方に工夫が必要であるというような指摘があつたので、その辺りは少し気になるころでした。

細かいところでは、6年生を中心に見させていただいて、5、6年生の下巻になるのですが、墨のところがありまして、その想像性という点で、「開隆堂出版」の方が、若干躍動感があるように思いました。

また、平和のところも2カ所を比べたのですが、ダイナミックさや協力し合う様子が「開隆堂出版」の方が良かったのではないかと思います。

私が一番印象に残ったのは「開隆堂出版」の竜を見るということが30ページにありまして、この辺りで少し感じたのは、竜というものに対して想像の世界だと思うのですが、色々なタイプの竜というものを表現しているところが、大変良かったと思いました。

様々なところを色々と比較してみたところ、私も「開隆堂出版」が良いのではないかということで、推薦したいと思っています。

青木委員 2社ということで、どちらが良いかという話なのですが、私も全体的、総合的には「開隆堂出版」が良いのではないかと思います。

いくつかポイントを挙げさせていただきますと、まず、細かい点ですが、道具のアイコン、これがそれぞれ両方ともあります。「開隆堂出版」は上の方で、文字もついている形で、かなり分かりやすい状況になっています。

「日本文教出版」もきちんと付けているのですが、ページの下の方で、本当にアイコンの形になって若干小さいというところもありますので、この辺りは工夫のしどころかというところでは。

また、松澤委員からお話があった、ダイナミックさというところでは、題材として色々なテーマを取り上げたということと、これも先ほど「生活」のところでも気になったのですが、「図画工作」というのは物をつくるという活動が最終的に児童にとって大事な話になります。そこで、イメージをどのようにつくってあげるのかということが、大事なポイントだと思っていますので、そのような中でテーマをどのように設定しているのかということを見つけたときに、先ほどの竜の話もそうなのですが、例えば「開隆堂出版」の5、6年生の上巻にあるように、24ページ、時空を超えてというのが少し気になってひっかかっています。

やはりイメージをさせるという意味では、これは全ての科目でそうなのですが、これから先をある程度イメージしてもらおうという癖をつけることは、今の変革の時代でもとても大事で、話を広げ過ぎなのかもしれないですが、その頭の中にあるもの、一番表現しやすいのは、図画なり工作なりかと思ったときに、このテーマを与えてあげているというのは、割と大事な話なのではないかと思いました。

この中では行ったことがない世界というものが中心になるかと思いますが、南の島で人魚に会ったなどというイメージはとても大事な話になるかと思いますが、この辺りが物語をつくったり、アニメーションやSFの世界というところへ将来展開していくような人材といえますか、そのような素質を見つけるうえでも、面白いのではないかと個人的に思ったところでは。

さらに「開隆堂出版」のポイントを挙げるとすると、題材の特徴に合わせて、もちろん「日本文教出版」でも「かたづけ」ということを意識されていて、どちらも出ているのですが、「開隆堂出版」が「安全」という視点での表記を非常に丁寧にされていたというところを1つ挙げさせていただきまして、「開隆堂出版」を推薦させていただきます。

高野委員 私も「開隆堂出版」が良いと思いました。

学習のめあてが分かりやすく、青木委員が言われていたように、その題材で使用する用具類がページの左上のところに文字入りで載っているもので、どのようなものをこの授業で用意すれば良いのかということが分かりやすくなっています。

また、2社を比べたときに、何が違うのかと思ったら、やはり文字による情報量が「開隆堂出版」が少ないということと作品の配置の仕方のせいなのか、同じようでも何かすっきりしているという点で「開隆堂出版」が良いと思いました。

目次のページがあるのですが、ここで、この教科書で行う活動が写真入りで全てまとめられているので、見通しが立つといえますか、どのようなことを勉強するのかということが1年を通して見られるようになっている点もとても良いと思いました。

それから、3、4年生の上巻の13ページ、5、6年生の下巻の11ページのところに、両方とも粘土の造詣の学習なのですが、粘土でつくって焼き物にして

というのが2つ出ているのですが、よく学校の作品展、展覧会などを見に行くと、陶芸をやっている学校も多いので、こうしたものも参考になっていくのではないかと思います。

以上の点から、私は「開隆堂出版」が良いのではないかと思います。

教 育 長 私は、主に1、2年生の方を見させていただきました。

小学校の場合、「図画工作」は3年生辺りから専科の先生方が中心に授業をされるということで、主に1、2年生の、これも「生活」等と関連付けた指導というようなどころで見ることと、1年生の頃に、はさみやカッターといったところの指導、安全というところと、先ほど青木委員がおっしゃっていた片付けといったところへの配慮という点。

安全というところでは、両社ともかなり丁寧にやっているのですが、カッターの使い方、右利き、左利きといったところにも配慮しています。

カッターの使い方については、「開隆堂出版」が色々なバリエーションをつくって表していると思っていますので、違いが出てきているところです。

それから、高野委員と同様に、教科書をぱっと見たときに「日本文教出版」と「開隆堂出版」の違いは何かというと、「日本文教出版」は、細かい写真などの説明、つまりプロセスを表現しようとしているという感じがするのですが、「開隆堂出版」はモチベーションを高めていくことと、最終的な様子というものをとても大事にしているのではないかと思います。

活動が始まると子どもたちはほとんど教科書を見ないですし、黒板に先生がそのプロセスを表示していくということが多いということからすると、インパクトがある、イメージを高めていく、モチベーションを高めていくというその構成から、私も「開隆堂出版」の教科書の構成というのが非常に良いと思いますし、特に1、2年生にとってみると非常にダイナミックな絵が並んでいますので、具体的なイメージが描きやすいと思っています。

それから、「開隆堂出版」の3、4年生の上巻のところ、「図画工作」では珍しい「話し合いの仕方」という、どのように学ぶかということも出ていて、この辺りも工夫をされていると思っています。

それから、とても大事だと思ったのは、「開隆堂出版」の場合には、文章の改行を必ず行って、単語や分節が行をまたがないような読みやすさが意識されているということ、これは「音楽」、「図画工作」、「家庭」などでは少し意識をしていただきたいということを思っています。

そのようなことを含めて、私も「図画工作」については「開隆堂出版」を推していきたいと思っています。

全員のご意見を踏まえまして、「図画工作」については、「開隆堂出版」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(はい)

教 育 長 それでは、「図画工作」については、「開隆堂出版」を仮採択することとします。

 今回の審議については、次の「家庭」を最後にしまして、「保健」、「英語」、「道徳」、「小学校特別支援」、「中学校特別支援」については、次回の教育委員会に回させていただきたいと思っております。

 それでは、「家庭」の審議に入ります。

指 導 室 長 「家庭」につきましては、2社でございます。

 「東京書籍」、「開隆堂出版」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。

 質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

松 澤 委 員 非常に難しかったのですが、どちらか選ばなければいけないということで、まず、大きさが「開隆堂出版」と「東京書籍」では違うという点で、私の意見としましては、小さくて邪魔にならない「開隆堂出版」が良いのではないかと若干感じました。

 また、「開隆堂出版」の裏面に、切る見本があって、しかも右利きと左利きがあるということで、これも良いところではないかと感じました。

 さらに、「開隆堂出版」と「東京書籍」、どちらも下のところに英語が書いてあります。そちらの英語の違いについて確認したところ、「開隆堂出版」の方が「家庭」に関連したものを使っているということだったので、そちらも良いのではないかといいところです。そのほか、QRコードが、これはついでなのですが、少し使うところが多いということもあります。

 細かいところでは128ページにプログラミングというところがありまして、無理やり入れているのかもしれないのですが、「家庭」の中にもプログラミング教育が出てきているという点については、工夫していると感じましたので、その前の126ページの小中連携教育を意識しているということもあって、また、その前の124ページの持続可能な社会を生きるというテーマ、板橋区としてもこのようなテーマでやっていただくのは非常に良いのではないかと思います。

 また、「生活」とお金の話というのが「開隆堂出版」は入っていたので、非常に必要な分野なのではないかと感じました。

 それ以外では「開隆堂出版」は10ページから19ページのところで、少しずつ積み上げるような設定がしてあるという点で、最初のところで非常に力を入れているという点は評価できるのではないかと思います。

 逆に「東京書籍」は、まず、32、33ページに同じように、こちらは持続可能な暮らしとお金の使い方について両方まとめて書いてあるというところで、これについてはどちらが良いのかは分かりませんが、一緒に出ておりました。

 それから、140ページになりますが、こちらの図が見開きで非常に分かりやすいという点で、先ほどから出てきておりますが、「東京書籍」については、情

報量が豊富で、とても分かりやすいです。そして、教科書を見ていても、非常に見やすく、絵も写真も大きくて、非常に使いやすい点もありますので、どちらということとはなかなか言えないのですが、どちらか選択するということであれば、全体的なバランスを見て「開隆堂出版」を推したいと思いました。

青木委員 私も松澤委員とほとんど同じ感じなのですが、他教科とのつながりという、今日何回も言っている話なのですが、最初の目次を開いたときに、「家庭」というのが、多分ぱっとイメージする家庭のイメージと、生活の見方、考え方の4つの視点というのが見開きに書いてあるのが「開隆堂出版」です。

協力する、助け合う、人々の生活や文化の大切さに気がつく、そして持続可能な社会をめざすという4つの視点で見ているというのは、色々な他教科との連携、あるいは接点といいますか、「家庭」が単純に実技や生きるための技術を身につけようという単純な話ではなくて、そのようなものが接点になっているという考え方があるのではないかと感じております。

目次自体を見ても、明確に持続可能な社会に生きるというようなところ、それから、ともに生きる地域での生活というようなところ、この辺りはもちろん同じイメージのものが「東京書籍」にも書いてあるのですが、直接ではないというところで、5、6年生になると、この辺りのキーワードはそろそろきちんと導入しても良いのではないかと思ったときに、「開隆堂出版」が良いのではないかと、最初に思ったことです。

中を見ると、やはり「東京書籍」は情報量が大変多く、授業が進めやすいようなところはあろうかと思いますが、「開隆堂出版」も、それぞれ技術のポイントの部分は、きちんと写真や説明で押さえられているという感覚を受けました。

ですから、現場で使っていく先生方の意見もあろうかと思うのですが、少し伺ったところでは、裏表紙の野菜の切り方がすごくまとまって良いという意見があったり、3つのステップ、「見つける・気づく」、「わかる・できる」、「生かす・深める」というステップで学習、授業が進められるようにつくられているので、授業としても使いやすいというご意見もあったことを踏まえて、私は「開隆堂出版」を推薦させていただきます。

高野委員 2社を比べると、どちらも写真やイラストが有効に使われていて、分かりやすいも内容になっています。

実習時の器具、用具の使い方や衛生面での注意点や安全などにも十分に配慮されています。環境を考えて工夫することや、災害に備えること、食物アレルギーといった視点も大切にされていて、どちらもとても良い内容で決めかねました。

「東京書籍」の場合は、やはり今までの教科と同じように、大きさを生かした写真の良さです。

131ページで、包丁で切る写真というものがあるのですが、左利きと右利きで、恐らく子どもの手と同じ大きさになっているのだと思います。

以前、中学校の家庭科の授業を見た際に、クラスの中で4人ほど左利きの子ども

もがいて、左利きのこうした写真は、やはり大切だと思いました。

また、同じく83ページの調理実習のところでは、野菜を切る実寸写真が載っているのですが、このページ、これを見て、例えばニンジンほどのくらいの大きさに切るのかなどが分かりやすい。本当に「東京書籍」は、こうした点が素晴らしいと思いました。

一方、「開隆堂出版」ですが、大変細かい配慮が色々な部分でされていて、それがとても良いと思いました。

本当に細かいのですが、例えばクッキングのはじめの一步という11ページのところですが、ここで手を洗うというのが下に書いてあります。「東京書籍」の場合は、後ろの資料編に入っているのですが、授業の進行とともにこうした注意点が写真できちんと書かれています。

その次の13ページでは、お茶を淹れるのですが、お茶を2グラム、小さじ1杯入れますというところでは、「東京書籍」の場合は、そのまま言葉だけなのですが、「開隆堂出版」の場合は、小さじでの計り方、子どもたちは初めてここで学習するので、すり切りペラを使ってすり切りでのはかり方をやっていたり、私が一番良いと思ったのは片付けの仕方のところで、後片付けの仕方というのが17ページにあるのですが、ほとんど同じようなことが書いてあるのですが、流し、コンロ、調理台の全体をきれいに拭く、まな板やふきんを天日に干すというところは「東京書籍」には書いていないのですが、実際の家庭ではこうしたことはやってほしいというところではあります。

他にも、「できることを増やしてクッキング」というところ、86ページですが、下のところに「おいしく炒めるコツ」というのがあって、過熱が終わったらすぐに器に盛りつけましょう。過熱が進み過ぎると材料から水が出てしまいますというので、すぐ盛りつけたものと、しばらく置いていたものが写真で表されていたりして、本当に細かい点なのですが、実際に家事をする中でぜひ子どもたちには、実行できるかは別としても、知っておいた方が良いでしょう。「開隆堂出版」にはたくさん書いてあると思いました。

両者を比べて、写真の大きさなどでは「東京書籍」の大きな写真にはかなわないのですが、「開隆堂出版」のこのような細かい配慮というところが良いと思うので、私は「開隆堂出版」を推薦したいと思います。

教 育 長 2社どちらかということになると思いますが、結論から言いますと、私も「開隆堂出版」を推していきたいと思っています。ただし、「東京書籍」についても、教科書をぱっと見たときには、明らかに非常にダイナミックな差が伴っていますので、子どもたちにとっては印象が強いのではないかと思います。

とにかく情報の量がとても多いので、何を伝えていくのかというところの難しさが少しあるのではないかと思います。

そうした中でも、いつも言うように、下の方に言葉ということで、色々な語彙の量を増やすというところの工夫が見られていたり、それから、内容的な意味合いでは、写真やイラストと、説明の文章が非常に分かりやすく表現されているな

どの工夫もあると思います。

ただし、「開隆堂出版」については、最初のところに生活の見方、考え方の4つの視点というのを、「家庭」の非常に大きなポイントを貫いている考え方であると思っているのと、「開隆堂出版」の場合は、各教科との関係、連携というのを非常に重要視していて、今までに習った各教科とどのようなつながりがあるのかというところで、表示がされています。

例えば、18ページには「理科」の3年生、植物の育ち方というのがぽんと書かれてあって、そうすると先生は「みんな、ジャガイモを育てたよね」、「大根を育てたよね」というようなことで、つながりが持てるのではないかと考えています。

また、ここの一コマというところで、これもとても言葉の語彙の量と質もうまく使っているものなのではないかと思いました。

それから、松澤委員がおっしゃっていたように、私も「家庭」については、プログラミング、作業の順位性というのがとても大事で、それを強く打ち出していると感じています。128、129ページで、このアルゴリズムといいますか、繰り返していくことによってなし得ていくという、コンピューターが必ずしもプログラミングではなくて、プログラミング的思考というところをうまく押さえているというようなところを評価していきたいと思っています。

そのようなところから、私は「開隆堂出版」を推薦したいと思います。

長沼委員 どちらの出版社も本当によく考えられ、工夫されてつくられたのだというのを見てとれました。

びっくりしたのは、どちらの社もページの下に、そのページに関連する「家庭」の用語、単語を英語で示していくという記載があります。高学年ですから「英語」との連携を図ったということで、本当にこれはどちらもお見事なところでした。

私も「開隆堂出版」を推しますが、その理由は、まず3ページのところに「家庭科学習の進め方」とありますが、既に青木委員もご指摘のように、「見つける・気づく」、そして「わかる・できる」、そして「生かす・深める」と明確に3段階を踏まえていくのですが、これは非常にシンプルな表現で分かりやすい。子どもにも分かりやすいし、先生にも分かりやすいということで、これで全部の単元が展開されていくということが、全てを通して分かるようになっていまして、これが良いと思いました。

「東京書籍」は、同じくそのプロセスが3、4、5ページのところに書かれていますが、全く違います。「課題発見」、それから「課題解決・実践活動」、そして「評価・改善」という、いわゆる大人向けの表現というか、先生向けかと思っています。

5、6年生ですから、もちろん高学年の子どもたちで理解できると思いますが、やはり教科書ということで、その進め方というのは子どもたちも見ることなので、ぱっと見て、より分かる「開隆堂出版」のこの3つの平仮名のまぎった表現がす

っと頭に入って、「家庭」というのはこうやって学習するのだという過程、プロセスがよく分かると思いました。

それから、板橋区授業スタンダードについて、どちらも適合はしているのですが、よりまとめの部分が見やすい。

例えば「開隆堂出版」の19ページのところに、「振り返ろう」というのがあって、巻の最後には必ずこのようなものが用意されています。

「東京書籍」の方も振り返りがあるのですが、それは各項目の欄外、一番下の欄外にあって、もちろんそれを見れば振り返りができるのですが、よりスペースをとって振り返りのことを書いているのは「開隆堂出版」のこの部分ということになりますので、このようなところも配慮されていると思いますし、板橋区の学校での授業には適合するのではないかと考えました。

それ以外は、皆様がおっしゃっていたことと同じですので、私も「開隆堂出版」を推薦したいと思います。

教 育 長 それでは、「家庭」については、「開隆堂出版」を仮採択とすることにご異議ございませんか。

(はい)

教 育 長 それでは、「家庭」については、「開隆堂出版」を仮採択することとします。議事運営の都合により、本日の審議は以上で終了といたします。

次回の教育委員会では、「保健」から審議いたします。

冒頭にお諮りしたとおり、残りの教科につきましては、8月1日木曜日に、臨時で教育委員会を開催して審議いたします。

開催時間、開催場所ともに、本日と同じ午前10時から第一委員会室での開催といたします。

次回の審議につきましても、初めに、令和2年度区立小・中学校使用教科用図書採択に関する議案及び請願を審議し、終了後、そのほかの議案を審議、報告事項を聴取する予定です。

それでは、以上をもちまして本日の教育委員会を終了いたします。

午後 4時 38分 閉会